

工ト22-53

神靈發顯序



天地の景象は千態萬様にして。人智を以て窺測るべ

ず。必す神の主宰ありて。一切の建造施設を爲し。以て善く其

を極め其妙を盡すこと。何人も想像し得る所ならむ

試に仰て天文を觀よ。日月星辰は光輝を發し空に懸りて旋轉し

毫も間斷障礙あること無し。而して鳴雷虚空に鼓動して時に氣

候を變化し。條風天下に透過して遠く萬物を生養す。甘雨を降し

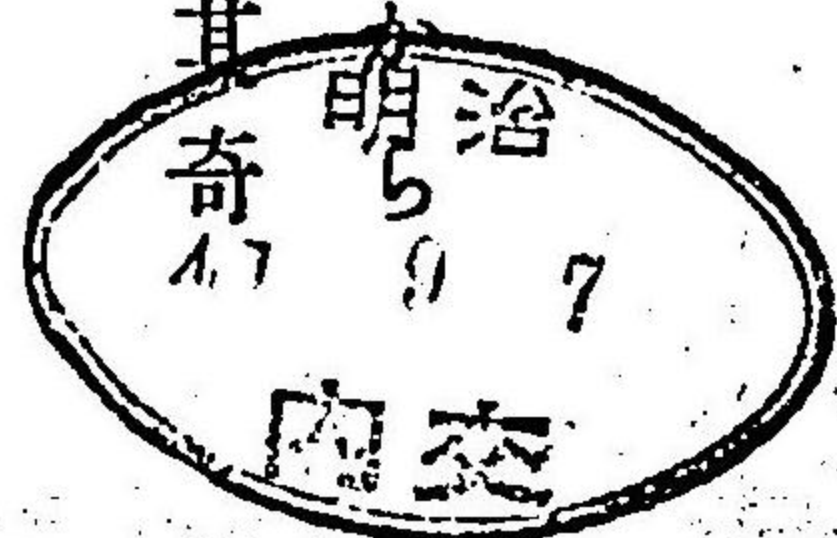
て潤澤し晴輝を放ちて乾燥す。斯く自然の常理ある者は。必ず神

の靈妙に因て以て天道の功を治めしむる所以に非すや 試

に俯して地理を察せよ。山谷原野河川海島等は文章を列ね地に

聯きて齊整し毫も錯亂差毛あること無し。是皆偶然無意に出る

者にあらず。而して草木禾穀は地上に繁殖し新陳代謝して其終



二
始を盡し。魚鼈貝藻は波底に生育し浮沉生滅して其奇怪を極む。鳥は空に翔り獸は地に走り各其性を遂るものは。必ず神の靈活に因て斯く地道の功を成さしむる所以に非すや 尙ほ吾人か常に觀る所の光景に於けるも。春去れば夏來り夏去れば秋來り秋去れば冬來り冬去れば春來る。暑往けは寒來り寒往けは暑來る。相推て變化を極め循環して止息すること無く能く發生長茂條達し收斂歸藏する所以の者は。是我が造化三神の産靈の元徳に資りて陰陽二氣の靈動妙活あるに因らすんば非す 然れは天象地體の景狀活動を始め四海萬般の事物事業の保護。人々箇々身體の組織生養娛樂。禽獸蟲魚草木の繁殖生滅。有機無機森羅萬象の起廢に至るまで。悉く天神地祇の神靈之に發顯し。各其持分に依て主宰し給ふこと亦疑ふべくもあらざるなり 是は古事記日本書紀延喜式祝詞古語拾遺等の眞傳及び舊事紀

等の古傳に因て其神徳を曉るになむ。抑我皇國の神典は畏くも皇祖皇宗の遺訓にして萬國無比の寶典なる事は更なり。神人の起原建國の由來皇統無窮の神勅等。總て神代に原因して今に其實況を傳へらるゝが如き亦他に其例を見ず 就中神典國史に載せられたる神々の功德と御名の義に因て慥に其神靈は各別に萬物の上に發顯し。其稜威は各別に萬事の上に赫々たること。最も奇く最も貴く窺ひ奉るべく。いかて彼多神論の如き茫茫乎たる謾説に比すべけんや。是即ち神國の神國たる所以にして。神代の昔より人世の今に至るまで。幽政の神助ありて常恒不易に奇靈玄妙の御幸を仰くにこそ されは此皇國に生れ出る青人草の限りは。貴賤となく上下となく。何れも神の御裔なれば神典國史を讀み神々の御徳を仰き崇敬ひ奉ること。即ち人の人たる眞情にして然あらては得あらぬ道理なりけむ 然れど

も汎く神典國史に通することは即ち専門の業にしあれば何人も悉く學び得んことは難かるべし。故に此篇の如きは全體を知るを以て主意とすれば。只主宰の神々のみを擧げ。其神徳の如きは該眞傳古記を抄譯して其出典を證明し。概括併合して讀者の便に供し。旁ら古事記傳玉禪風土記徵古新編等を附記し以て讀者の參考と爲す。茲に篇成るに及びて題して神靈發顯と云ふ

明治四十一年五月

正五位勳五等 笹田默介 謹識

神靈發顯

神祇掲上

造化元靈神	一
神世七代	一
神祇	一〇
天神七代地神五代	三
日神	三
月神	三
星神	三
北斗星神	四〇
二十八宿神	四
木神	四

草神 三
 風神 三
 火神 四
 金神 四
 土神 四
 水神 五
 方位神 五
 雨神 六
 雷神 六
 山神 五
 岩神 五
 海神 五
 浦神 五

島神 六
 水戸神 六
 水分神 六
 道神 六
 道祖神 六
 市神 六
 國土修理神 六
 國魂神 六
 地主神 六
 治幽事神 六
 五臟神 六
 心臓神 六
 肺臓神 六
 肝臓神 六
 脾臓神 六
 腎臓 六
 神 六
 耳神 七
 目神 七
 鼻神 七
 口神 七
 陰神 七
 五境神 七

鎮魂神 八二

護夫婦好合神 八五

壽命神 八七

乞壽命神 八七

智慮神 八八

忍耐神 九〇

主中正徳神 九二

前進勇徳神 九三

武神 九四

行旅神 九六

渡水神 九七

門神 九七

井神 九八

庭神 九九

宅神 一〇〇

竈神 一〇一

廁神 一〇四

穀物神 一〇六

播百穀神 一〇九

農耕神 一一一

機織神 一一三

衣食住神 一一四

食物蠶神 一一八

買賣神 一二九

造酒神 一二九

漁獵神 一二九

木工家作神 三三
 金工神 三三
 鑄工神 三三
 福德神 三三
 煩神 三四
 疫疾神 三四
 醫藥神 三七
 劍靈神 三六
 鳴鏑神 三〇
 樹種神 三四
 木綿神 三五
 麻神 三五
 薪神 三六

鹽神 三六
 馬神 三七
 獸畜神 三七
 禽鳥神 三七
 介蟲神 三八
 龍鱈神 三八
 樂章神 三八
 笛神 三九
 鼓神 三九
 太鼓神 三九
 琴神 四〇
 神樂俳優神 四〇

神靈發顯

○造化元靈神

天御中主神

高皇產靈神

神皇產靈神

○神世七代

一代 國之常立神

二代 豐雲野神

三代 宇比地邇神

四代 妹須比智邇神

角杙神

國常立尊

國狹槌尊

豐斟淳尊

湍土貴尊 亦曰湍土根尊

正五位勳五等 笹田默介謹編

妹活杙神

沙土煮尊 亦日沙土根尊

五代

意富斗能地神

大戸之道尊 亦日大戸摩彦尊 大富道尊

妹大斗乃辨神

大苦邊尊 亦日大戸摩姬尊 大富邊尊

六代

淤母陀琉神

面足尊 亦日吾屋惶根尊 青檀城根尊

妹阿夜訶志古泥神

惶根尊 亦日忌檀城尊 吾屋檀城尊

七代

伊邪那岐神

伊弉諾尊

妹伊邪那美神

伊弉冊尊

天地初發る時。高天原に成神の名は天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此三柱の神は並獨神成坐て身を隠給へり。次に國稚く浮脂の如くして。久羅下那洲多陀用幣流の時に。葦芽の如く萌騰る物に因て成神の名は宇麻志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此二柱の神も亦獨神成坐て身を隠給へり。上の五柱の神は別天神なり。次に成神の名は國之常立神。次に豐雲野神。

此二柱の神も亦獨神成坐て身を隠給へり。次に成神の名は宇比

地邇神。次に妹須比智邇神。次に角杙神。次に妹活杙神。次に意富斗

能地神。次に妹大斗乃邊神。次に淤母陀琉神。次に妹阿夜訶志古泥

神。次に伊邪那岐神。次に妹伊邪那美神。上の國之常立神より。下の

伊邪那美神まで。併て神世七代と稱す。獨神は各一神を一代と云ふ。雙神

云(古事記)

開闢之初。洲壤浮漂ること。譬は猶游魚の水上に浮るが如し。時に

天地の中に一物を生ず。狀ち葦芽の如し。便ち神と化爲る。國常立

尊と號す。次に國狹槌尊。次に豐斟淳尊。凡て三神なり。乾道獨化す

所以に此純男を成せり。次に神有り。湍土煮尊。沙土煮尊。次に神有

り。大戸之道尊。大苦邊尊。次に神有り。面足尊。惶根尊。次に神有り。伊

弉諾尊。伊弉冊尊。凡て八神なり。乾坤の道相參りて化る所以に。此

男女を成す。國常立尊より。伊弉諾尊。伊弉冊尊まで。是を神代七代

と謂ふなり(日本書紀)

天之御中主神は大元より寂然幽邃の天表に在り。天之眞心の
本然にして偏せず。倚せず。天地の中主となり。大氣の精神造化
の元靈に坐し。過ることなく。及ばざることなく。萬縁に照應し
萬事を攝領し。全世界に彌淪充塞して。至大至微漏る所なく。天
地の始より萬世の後に至るまで。此大神の洪徳に由らざるは
なし。故に天地造化の妙機より。世界の所有る神人萬物を千萬
世に化育蕃殖して止息することなき。水氣の元神に坐すなり。
高御産巢日神は陽徳に坐し。神靈天に在りて造化の妙用を主
宰し。萬物生産の靈徳ある神に坐すなり。延喜式神名帳に。山
城國乙訓郡羽束師坐高御産巢日神社。大和國添上郡宇奈多
理坐高御魂神社。同國十市郡目原坐高御魂神社。二座とあり。
神産巢日神は陰徳に坐し。神靈地に降りて。人の生死禍福神魂

賦與の事を主宰し給ふ。靈徳に坐す神なり。以上三柱を造化
三神と稱奉るなり。

國之常立神は天祖具足の水徳の天地の間に坐し。遍滿充塞し
て。常恆不變に。天地の成立することを主宰し給ふ。靈徳に坐す
神なり。

國狹槌尊は天祖具足の水徳の天地の間に坐す。豐雲野神の又
の名なり。

豐雲野神。又豐斟淳尊は天祖具足の水徳の天地の間に坐し。遍
滿充塞して。普く萬物を主宰し給ふ。火徳の神に坐すなり。
宇比地邇神。須比智邇神。又埜土煮尊。沙土煮尊は。土徳の神に坐
すなり。

角杙神。妹活杙神は。木徳の神に坐すなり。

意富斗能地神。妹大斗乃辨神。又大戸之道尊。大苦邊尊は。水徳の

神に坐すなり 延喜式神名帳に阿波國名方郡意富門麻比賣
神社あり。

淤母陀琉神妹阿夜訶志古泥神又面足尊惶根尊は金徳の神に
坐すなり。

徵古新編には淤母陀琉日子神淤母陀琉比賣神とあて之を
火徳となし阿夜河志古泥神阿由河志岐神として之を金徳
となす。

伊邪那岐神伊邪那美神は天神諸の命を以て二柱神に是の多
陀田幣流の國を修理固成と詔して天沼矛を賜ふ二柱神共に
天浮橋に立て天沼矛を持て滄溟を探り給へば鋒滴凝結して
即ち一島を成す名けて磯敷盧島と云二神其島に降坐て天の
御柱を見立て八尋殿を化作て是に始て夫婦の道を爲し然後
大八洲國及び山川草木を化生し羣神を生給ふ中にも御日子

神天照大御神は光華明彩して六合の内に照徹り給へば即ち
天に送りて天上の事を授け給ひ月神月讀尊は其光彩日神に
亞て麗しければ亦天に送りて日に配て夜の食國を授け給ひ
素戔鳴尊は根國を知食させ給ふ故に天政茲に立ち地道既に
行はる又風神志那都比古神は風を司り火産靈神は火を司り
金山比古神金山比賣神は金を司り彌都波能賣神は水を司り
埴安毘賣神は土を司り給ふ萬物盡く此五柱の御子の元靈に
洩る事なし斯て伊邪那美神は火神軻遇突智を生み灼れて神
退給ひ遂に黄泉國に入り給ふ其時に伊邪那岐神は妹伊邪那
美神を追往て黄泉國に到り種々の枉事起りて逃歸り給へり
既に還りて汚穢の處に到るを追悔ひ吾身の穢を滌んとて筑
紫日向小戸橋の櫛原に至りて祓除ひ志身禊の神業を以て靈
威の神祇を呈し改過爲善の神道を立給ふ凡そ天下の蒼生は

皆此大神の神裔に非ざるはなし。神功既に畢りて幽宮を淡路洲に構へ寂然として長く隠れ給ふなり。又天に登りて日の少宮に留り給ふと云ふ。又此二神は鎮魂の爲にも生産靈足産靈と稱奉る。靈徳に坐せば。最も尊き事にこそ。伊弉諾尊は多賀大明神と稱し。淡路國津名郡多賀村に鎮坐する。官幣大社伊弉諾神社に祀る。又伊弉諾尊伊弉冊尊は近江國犬上郡多賀村に鎮坐する。官幣中社多賀神社に祀る。日本書紀一書に。伊弉冊尊火神を生む時に灼れて神退ぬ。故に紀伊國熊野の有馬村に葬る。土俗此神の魂を祭る者は花時には花を以て祭る。又鼓吹幡旗を用ひて歌舞して祭ると云ふ。名神記に出雲秋鹿郡佐陀神社は伊弉冊尊なり。神功終るの日遂に足日山麓に葬る。所謂比婆山なる者は此地なり。蓋し兩説あり。其事蹟多くは出雲に在り。後世紀伊國に改葬せしか。共

に存して廢すべからずと云ふ。

古事記傳に曰く。神世とは人代と別て云稱なり。其はいと上代の人。凡て皆神なりし故に然言り。さて何時までの人は神にて。何時より以來の人は神ならずと云ふ。きはやかなる差はなき故に。萬葉の歌どもなどにも。たゞ古を廣く神代と云り。然れども事を分て云ときは。鵜葺草葺不合命までを神代とし。白檮原朝天神武より以來を人代とす。信に此朝の御時より世間のありさま新なりしかば。さも云つべきものなり。又曰く。此に伊弉那美神までを神世と云るは。後五代の神代に言りし稱の遺れるなり。其は人代となりて。後に鵜葺草葺不合命の御時までを申す如くに。五代の神代の時には。又此七代を神代と申せしなり。信に此七代は天地の初發の時にして。神の状も世のさまも又甚く異なりしぞかし。

○神祇

天神地祇

天地初發る時高天原に成坐る神の名は天之御中主神次に高御
産巢日神次に神産巢日神次に宇麻志阿斯訶備比古遲神次に天
之常立神五柱の神は別天神なり天神諸の命を以て伊邪那岐命
伊邪那美命二柱の神に詔して是の多陀用幣琉の國を修理固成
せと天沼矛を賜ひて言依し賜へり(古事記)

天之御中主神より天之常立神まで總て五柱の神あり是即ち
天神なり。

速須佐之男命出雲國の肥河上なる鳥髮地に降給ふ時に老夫と
老女と二人在りて童女を中に置いて泣く汝等は誰ぞと問賜へば
其老夫答て言す僕は國神大山津見神の子なり名は足名椎と謂
ふ妻の名は手名椎と謂ふ女の名は櫛名田比賣と謂ふと申しき

(古事記)

素戔嗚尊は國神の女を娶りて大己貴神を生み給ふ(古語拾遺)

日子番能邇邇藝能命天降給はんとする時天の八衢に居りて上
は高天原を光し下は葦原の中國を光す神あり天宇受賣神詔を
奉じて往て問ふ時に答て白す僕は國神猿田毘古神なり出居所
以は天神の御子天降坐と聞て御前に仕奉らんと參向ひ侍と申
まき(古事記)

日子番能邇邇藝能命詔はく木花佐久夜毘賣一宿にて妊身せり。
是我子に非じ必ず國神の子ならん佐久夜毘賣答て白す吾妊る
御子若し國神の子ならば産ん時に幸からず若し天神の御子な
らば幸からんと申まき(古事記)

神武天皇東征の時速吸之門に至り給ふ時に一漁人有り艇に乗
て至る天皇之を招て問て宣ふ汝は誰ぞや對て曰く臣は是國神

なり名を珍彦と曰ふ。由浦に釣す。天神の御子來給ふと聞て即ち
迎奉ると申さき(日本書紀)

天神とは天に成坐る神を云ふ。國常立神も。豐雲野神亦宇比地
邇神角杵神意富斗能地神。淤母陀琉神等も。皆天神なるべし。國
神とは此土地の神と云意なり。當國の人を國人と云ひ。當里の
人を里人と云が如し。人と云ずして神と云ふは。猶神代の言の
儘なり。今云天神地祇とは天に成坐る神も地に成坐る神も。總
て稱て天神地祇と申すなり。令義解に云凡天神地祇は神祇官
皆常典に依て之を祭る。又云凡天皇即位總天神地祇を祭る。昔
時神武天皇八十梟師を征し給ふ時に。天神の御誨に依て天神
地祇を敬祭り給ふを始とし。爾後歷朝に於て天神地祇を祭祀
し給ふ其例枚舉に違あらず。今尙賢所に奉齋し給ふと聞けり。

○天神七代地神五代

天神七代

- 一代 國常立尊
- 二代 國狹槌尊
- 三代 豐斟淳尊以上三代陽神
- 四代 湍土養尊陽神 沙土瓊尊陰神
- 五代 大戸之道尊陽神 大戸間邊尊陰神
- 六代 面垂尊陽神 惶根尊陰神
- 七代 伊弉諾尊陽神 伊弉冊尊陰神
- 地神五代
- 一代 天照大神
- 二代 伊弉諾伊弉冊尊の子なり
- 正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊
- 天照大神の子なり

三代 天津彦彦火瓊杵尊

正哉吾勝速日天忍穗耳尊の太子なり

四代 彦火火出見尊

天津彦彦火瓊杵尊の第二子なり

五代 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

彦火火出見尊の太子なり

以上皇代記に載する所なり。古事記傳に後世に此七代を天神七代と申し後五代を地神五代と申すなるはいかなるをこの者の云初つることにか更に事の由を考へずたゞに強て天と地とに配むとての漫説なるを世に普く云なれてそのいみじき非なることを辨へたる人もをさをさ聞えぬはいかにぞや。先此七代を天神と申せること古書に見えたることなし云云。既に天之常立神の下に上件五柱を天神と申すよしことわり

たれば其次々は天神と申すに非ること明し。天位を知看を天神と申すなど云説は近世の漢意の例の私言なり。天に坐神をこそ天神とは申すなれ。然るに伊邪那岐伊邪那美神の御事を記せるさまを考るにも天に坐神とは見えず。此地に坐神とこそ見えたれ。然ればかにかくに此七代は並此國土に就坐る神たちにぞ有ける。然はあれども又正しく是を地神と稱せることも物に見えざるなり。地神とは後五代に至て此國土なる神を天神に對て申す稱にぞありける。さて又地神五代と申すも甚く違へることなり。まづ天照大御神は高天原を知看て。今も眼當天に坐ませば天神なること更なり。次に天之忍穗耳命。日子番能邇邇藝命も高天原に成坐つれば天神なり。故是以穗穗手見命より以下を天神御子と申すなり。さて此穗穗手見命。葺草葺不合命は此國土に生坐て。此國土に坐まし、かば天神

とは申さず。然れども又此を地神と申せることは、更に物に見えず。國土には坐れども、天神御正統に坐が故に、皇孫とも、又漢文には天孫とも申すなり。かゝれば、天神七代地神五代と申すは、返々當らぬ妄稱と知るべしと云ふ。然れども此五柱神は、我皇祖天神に坐せば、其尊きこと限りなし。故に更に其御功德の状を左に記さぬ。

天照大御神

天照大御神、天上に在坐て、葦原中國に保食神有と聞給ひ、月夜見尊をして就て之を候せしめ給ふ。月夜見尊勅を受けて降り、己に保食神の許に到る。保食神乃ち首を廻らして國に嚮へば、口より飯出づ。海に嚮へば、鱧廣物、鱧狹物、亦口より出づ。又山に嚮へば、毛鹿物、毛柔物、亦口より出づ。其品物を悉備て之を百机に貯て饗だてまつる。是時月夜見尊忿給ひ、穢き鄙き口より吐出

の物を以て我を養ふと言て、廻ち劔を抜て擊殺し。然後復命る。き時に天照大御神甚く怒り、汝是れ惡神なり。相見ずと宣ふ。大御神復天熊人を遣し往て看せ給へば、是時保食神實に己に死せり。其神の項に牛馬化爲有り。願上に粟生り、眉上に蠶生り、眼中に稗生り、腹中に稻生り、陰に麥及大豆小豆生り。天熊人悉持去て進奉る時に、天照大御神喜び給ひ、是物は顯見蒼生の食て活べきものなりと宣ひて、乃ち粟稗麥を以て陸田の種子と爲し、稻を以て水田の種子と爲し、又天邑君を定めて、即ち其稻種を以て、始て天狹田及長田に殖給へば、其秋垂穎八握莫莫然甚快し。又口裏に蠶を含んで、絲を抽ことを得たり。此より始て、養蠶の道有と云。また始素戔鳴尊、天に昇坐の時、溟渤之を以て鼓盪し、山岳之が爲に鳴响き、此則ち神性雄健きが故に、然らしむるなり。天照大御神素より其神の暴惡を知食し、來詣るの状

を聞食に至つて乃ち勃然に驚給ひて曰く吾弟尊の來こと善
意を以てせんや謂に當に國を奪はんとする志有てか夫父母
既に諸子に任給ひて各其境を有たしむ如何ぞ當に就べきの
國を棄置て敢て此處を窺察するやと宣ひ乃ち丈夫の武備を
設て親迎て防禦し給ふ是時素戔嗚尊告て曰く吾元惡心なし
唯姉と相見えて然後父母の嚴勅の如く永く根國に就んとす
是以て遠來るのみと宣ふ時に天照大御神問て曰く若然らば
何を以て爾か赤心を明さんとす對て曰く請ふ姉と共に誓せ
ん夫誓約の中に必ず當に子を生べし若吾生所是れ女ならば
濁心有りとおぼせ若是れ男ならば清心有りとおぼせと宣ふ
於是天照大御神乃ち素戔嗚尊の十握劍を索取て打折三段と
なし天真名井に濯ぎ結然咀嚼て吹棄氣噴の狹霧に生所神號
て田心姫と曰ふ次に湍津姫次に市杵島姫凡て三柱女神坐す

既して素戔嗚尊天照大御神の警鬘及腕に纏る八坂瓊の五百
箇御統を乞取て天真名井に濯ぎ結然咀嚼て吹棄氣噴の狹霧
に生所神號て正哉吾勝速日天忍穗耳尊と曰ふ次に天穗日命
次に天津彦根命次に活津彦根命次に熊野櫛樟日命凡て五柱
男神坐す是時天照大御神勅て曰く其物根を原れば則ち八坂
瓊の五百箇御統は是れ吾物なり彼五男神は悉是吾兒なりと
宣ひ乃ち取て子養給ふ又勅て曰く其十握劍は是れ素戔嗚尊
物なり故に此三女神は悉是れ爾か兒なりと宣ひ之を素戔嗚
尊に授け給ふ是を劍玉の誓と云ふ是後素戔嗚尊爲行甚無狀
何則天照大御神天狹田長田を以て御田と爲し給ふ時に素戔
嗚尊春は則ち重播種子且其畔を毀し秋は則ち天班駒を放て
田中に伏しむ復天照大御神新嘗の時に當るを見て陰に新宮
に放戻し又天照大御神方に神衣を織つし齋服殿に居坐を見

て天班駒を剥て殿裏を穿て投納給ふ。是時天照大御神驚動給ひ。梭を以て身を傷るむ。此より慍を發して天石窟に入り。磐戸を閉て幽居る給ふ。故六合の内常闇にして。晝夜の相代を知らず。於是八十萬神等天安河邊に會合して其禱べきの方を計ふ。時に高皇產靈神の息思兼神深謀遠慮。遂に常世の長鳴鳥を聚めて互に長鳴せしむ。亦手力雄神を以て磐戸の側に立し。天兒屋命。太玉命は。天香山の五百箇眞坂樹を根掘して。上枝には八坂瓊の五百箇御統を懸け。中枝には八咫鏡を懸け。下枝には青和幣白和幣を懸け。相與に其祈禱を致せり。又天鈿女命は。手に茅纏の稍を持て。天石窟の前に立し。巧に俳優を作る。亦天香山の眞坂樹を以て鬘と爲し。蘿を以て手纏と爲し。槽を覆てと。いろかし。神明の憑談を顯せり。是時天照大御神聞食て曰く。吾比石窟に閉居す。謂ふに豊葦原中國は必ず長夜とならん。云何

ぞ天鈿女命噫樂こと如此きやと宣ひ。乃ち御手を以て細く磐戸を開て窺給ふ。時に手力雄神則ち天照大御神の御手を取て引出し奉る。天兒屋命。太玉命。端出繩を界て請て曰く。復還幸し給ふこと勿れ。然後諸神罪過を素戔鳴尊に歸し。千座置戸を科て。遂に促徵り。以て其罪を贖ふ。已にして竟に根國に神逐ひにき。其後天照大御神遂に御子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊を葦原中國に降らしむ。將に天降坐んとする間に。皇孫已に生れ給ふ。天津彦彦火瓊瓊杵尊と號す。時に奏すこと有り曰く。此皇孫を以て代て降さんと欲す。天照大御神乃ち八坂瓊曲玉及び八咫鏡。草薙劍。三種寶物を賜ふ。又中臣上祖。天兒屋命。忌部上祖。太玉命。猿女上祖。天鈿女命。鏡作上祖。石凝姥命。玉作上祖。玉屋命。凡て五部神を以て配侍し給ふ。因て皇孫に勅して曰く。葦原千五百秋之瑞穗國は。是吾子孫の王たるべきの地なり。宜く爾皇

孫就て治むべし。寶祚の隆當に天壤と窮なかるべしと宣ふ。以上日本書紀又日本書紀一書を抄譯して述る所なり。徵古新編に云。三種の神寶は神代より皇統の御靈として傳はり來つる。我大御國の比類なき御寶にぞある中にも八坂瓊曲玉は天神諸の命を以て伊邪那岐伊邪那美二柱神に授け給ひし。沼矛は瓊と矛の二物にして矛は大地の堅めとなるべく。瓊は皇統の御靈たるべき者なれば。伊邪那岐命は其矛を自凝島に國の御柱と衝立給ひし時。其瓊を御頸に取懸給ひしを。玉の緒もゆらに取ゆらかして天照大御神に授け賜ひしかば。大御神は其頸玉を御倉板舉之神と齋き敬ひ。此上なく崇め尊び給ひしは。父大神の御依しを重しみ給へるのみならず。大御祖と坐す。天之御中主神の御靈實なるを以て深くも御心を盡させ給へるなり。草薙劍は須佐之男命八俣の大蛇を斬給ひし時に

其尾より得給ひし天叢雲劍なり云々。天照大御神は皇大神宮と稱へ奉り。伊勢國度會郡宇治郷五十鈴河上に奉祀す。御神體は八咫鏡に坐し。大神の親ら皇孫瓊杵尊に授け給ひ。同狀同殿に奉安せしめ給ひし所なり。人皇十代崇神天皇の六年に至り。皇女豐鍬入姫命に命じ給ひて。始めて御神體を倭の笠縫の里に移し奉り。それより八十餘年を歴て。人皇十一代垂仁天皇の二十五年に皇女倭姫命に命じ給ひて。鎮座の地を求めしむ。倭姫命大神の鎮座の處を求め。菟田筱幡に詣り。更に還て近江國に入り。東に美濃國を廻り。伊勢國に到り給ふ時に。天照大神倭姫命の御夢に誨給ひ。是の神風の伊勢國は即ち常世の重浪歸國なり。傍國可恰國なり。是の國に居んと欲すと宣ふ。故に大神の教の隨に。神宮を伊勢國に建らる。是を神宮の創始とす。大神は實に皇室の大祖に坐して。歷朝

の御崇奉諸神の比にあらず昔は皇女を以て齋宮となして祭祀に奉侍せしめ給ひき然して古來品位の階なく一宮の稱なく名神の祭に預り給はざるは其尊く坐して諸神と同じからざるが故なり又其祈年祭等の班幣を別案に安し五位以上の人を以て御使に差し神宮には神祇官の官を兼ねる者あるが如き又諸社に類なき所なりき後世に至るまで神殿は長く上代の風を存して千木堅魚木高く神徳を標し給ふなり

正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊

天忍穗耳尊を以て葦原中國に天降し給はんとする時天照大神手に寶鏡を持給ひて天忍穗耳尊に授て祝て曰く吾兒此寶鏡を視ること當に猶吾を見るがごとくすべし與に床を同くし殿を共にして齋鏡と爲すべし復天兒屋命太玉命に勅して曰く吾高天原に所御齋庭の穗を以て亦吾兒に當御即ち高皇

産靈尊の女號は萬幡姬を以て妃と爲し天降しまつらしめ給ふ時に虚天に居て兒を生む天津彦彦火瓊杵尊と號す因て此皇孫を以て親に代て天降しまつらんと欲す故に天兒屋命太玉命及び諸部神等を以て悉く相授け且服御の物一に前に依て授け給ひ然後天忍穗耳尊は天に還り給ふ是れ日本書紀一書を抄譯して述る所なり

官幣中社英彦山神社は豊前國田川郡彦山の麓に在り天忍骨尊を祀る和漢三才圖會に祭神北岳天忍骨尊中岳伊弉册尊南岳伊弉諾尊と云ふ

天津彦彦火瓊杵尊

天津彦彦火瓊杵尊葦原中國に天降給んとする時先驅の者還て白す一神有り天八達之衢に居りて其鼻の長さ七咫背の長さ七尺餘且口尻明耀き眼は八咫鏡の如くにして絶然たる

こと赤酸漿に似たりと云ふ即ち從神を遣して往て問し給んとす。時に八十萬神有り。皆目勝て相問ふことを得ず。故に特に天鈿女命に勅す。汝は是れ目人に勝れたる者なれば宜く往て問べしと宣ふ。天鈿女命乃ち其胸乳を露し帶を臍下に押たれ。笑嚙ひて向ひ立ち。天照大神の御子所幸道路に如此居る者は誰ぞと問ふ。衢神對て白す。天照大神の御子今當に降り給ふと聞く。故に奉迎して相待つ。吾名は猿田彦神なりと云ふ。天鈿女命復問ふ。汝は我に先だちて行んや。將我汝に先だちて行んや。猿田彦神吾先ちて啓行せんと對ふ。天鈿女命復問ふ。汝は何處に到るや。皇孫は何處に到坐んや。猿田彦神對て天神の御子は則ち筑紫日向高千穗櫛觸の峯に到坐べし。吾は伊勢の狹長田五十鈴川上に到るべし。又曰く吾を發顯者は汝なり。汝は吾を送て之を致すべしと云ふ。天鈿女命還り詣で報狀まうす。

皇孫於是天磐座を離ち。天八重雲を排分稜威の道別に道別て天降坐す。果に先の期の如く皇孫は筑紫日向高千穗櫛觸の峯に到り給ひ。猿田彦神は伊勢の狹長田五十鈴川上に到る。即ち天鈿女命は猿田彦神の乞ふ所の隨に遂に侍送る。是れ日本書紀一書を抄譯して述る所なり。瓊瓊杵尊は霧島神社と稱す。神宮は日向國と。大隅國との界なる霧島山の麓に在り。祠は舊と日向國諸縣郡に屬して之を霧島神社と號し。又霧島峰神社とも云ひしが。今は大隅國始良郡田口に在る者を以て其本社に定めらる。山上に天之逆鋒あり。世俗之を伊弉諾伊弉册二桂尊の立て給ふ所と云ふ。因て又兩所權現の稱あり。仁明天皇の承和四年始めて官社に列す。明治七年官幣大社に列し。社名を今の稱に改めらる。新田神社は薩摩國薩摩郡宮内龜山に在り。此地舊と新多と稱す。因りて號して新田神社と云ふ。皇

孫天津彦彦火瓊杵尊を祀る尊初め日向國高千穗穗觸之峰に天降り給ひしが後に薩摩國阿多郡鷹屋村に遷り給ひ遂に此地に崩す可愛之山陵に葬る可愛之山は即ち今の龜山にして其山狀龜形に類似せるを以て名づくると云ふ現今國幣中社に列す。

彦彦火出見尊

皇孫尊多山祇の女名は鹿葦津姬亦名は木花之開耶姬を妻となし一夜にして孕めり皇孫曰く天神の子と雖も何ぞ能く一夜の間に人をして娠ませんや汝か娠る所は必ず吾兒に非ず木花之開耶姬甚た慙恨み乃ち無戸室を作りて誓て曰く妾が娠る所若し天孫の胤にあらざんば必ず常に蕪滅びん若し實に天孫の胤ならば火も害ふこと能はずと云て即ち其室の中に入りて火を放ちて室を焼く始めて烟起る時に生出る御子を

彦彦火出見尊と號す次に生出る御子を火明命と號す凡て三子坐す兄火闌降命自ら海幸あり弟彦彦火出見尊自ら山幸あり始め兄弟幸を易ふ各其利を得ず兄命悔て乃ち弟尊の弓箭を還して己が鈎を乞ふ弟尊時に兄命の鈎を失ふ故に別に新鈎を作て兄命に與ふ兄命之を受ずして舊鈎を責て止す故に彦彦火出見尊憂苦むこと甚深く遂に鹽土老翁の謀を以て海神の宮に至り給ふ海宮に留り給ふこと三年將に還給んとする時海神便ち失たる鈎を授けて誨て曰く此鈎を以て汝兄命に與へ給はゞ其時陰に此鈎を呼て貧鈎と曰て然後に之を與へ給へ復潮滿瓊と潮涸瓊とを授けて誨て曰く潮滿瓊を漬は即ち潮忽ち滿ん此を以て汝兄命を没溺し給へ若し兄命悔て祈ば還潮涸瓊を漬ば即ち潮自ら涸る此を以て救ひ給へ如此逼惱

せば。兄命自伏し給んと云ふ。是を以て彦火火出見尊遂に天日
 嗣を知食給ふ。是れ日本書紀を抄擇して述る所なり。天津
 日高彦火火出見尊は。鹿兒島神宮と稱奉る。神宮は大隅國始良
 郡宮内に在り。本と火火出見尊を祀りて鹿兒島神社と稱せし
 が。後又仲哀天皇神功皇后應神天皇仁德天皇等を合祀して之
 を大隅正八幡とも稱せり。當國の一宮にして。延喜の制大社に
 列す。明治の初年其社號を改めて鹿兒島神宮と云ひ。後又官幣
 大社に列す。或説に神社の東方に籠山といふ村落あり。此處
 即ち尊の都し給ふ所の地なり。鹿兒島神社は神武天皇の御創
 建なりと云ふ。

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

彦火火出見尊海神の宮に至り海神の女豐玉姬を娶り留住て
 己に三年を経る。將に歸去んとするに及び。豐玉姬天孫に謂て

曰く。妾己に娠めり。久しからずして産むべし。妾必ず風濤急峻
 の日を以て出て海濱に到らん。我が爲めに産室を作りて相待
 給はんことを請ふと。彦火火出見尊己に宮に還り給ふ。後豐玉
 姬果して前期の如く。其女弟玉依姬を將ひて直に風波を冒し
 海濱に來り到る。産時に臨に逮び請て曰く。妾産時幸は看こと
 勿れ。天孫猶忍び給ふこと能はず。竊に往て之を覘ふ。豐玉姬産
 に方て化して龍と爲る。甚慙て曰く。若し我を辱めざれば海陸
 をして相通して永く隔絶無からしめん。今は既に辱めらる。何
 以親昵の情を結ばんやと云ひて。乃ち草を以て兒を裏み之を
 海邊に棄て海途を閉て徑去る。故因て以て兒に名けて彦波瀲
 武鸕鷀草葺不合尊と曰すと云。是れ日本書紀を抄擇して述る
 所なり。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊は。鵜戸神宮と稱奉る。神
 宮は日向國南那珂郡宮浦に在り。舊と鵜戸權現と稱す。明治七

年改めて鵜戸神宮と稱し現今官幣大社に列す

○日神

天照大御神

○月神

月讀神

伊弉諾尊伊弉册尊共に議て曰く吾己に大八洲國及び山川草木を生り何ぞ天下の主たる者を生ざらんや於是共に日神を生み給ふ大日靈貴と號す此子光華明彩六合の内に照徹る故二神喜んで曰く吾息多なりと雖も未た若此靈異の兒は有らず宜く久らく此國に留べからず自ら當に早く天に送りて授るに天上の事を以てすべし次に月神を生み給ふ其光彩日に亞ぐ以て日に配て治すべし故亦天に送り給ふ(日本書紀)

照大日靈尊と云ふ月神一書に月弓尊又月夜見尊又月讀尊と

云ふ古事記は書紀と其生出坐す狀同じからずそは伊弉那岐神の黄泉國より歸りて禊祓給ふ時に天照大御神次に月讀命次に建速須佐之男命を生給ふ此時に伊弉那岐神三貴子を得給ふことを大に歡喜し給ひて即ち其御頸珠の玉緒を由良に取り由良迦ゑて天照大御神に授賜ひ詔ありて汝命は高天原を所知と事依ゑ給ひ次に月讀命に詔して汝命は夜之食國を所知と事依ゑ給ひ次に建速須佐之男命に詔して汝命は海原を所知と事依ゑ給へり是に於て日月を主宰る給ふ神の坐すこととなりて世界の暗黒を照し給ふ

神武天皇東征の時登美能那賀須泥毘古軍を興し待向ひて戰ふ天皇遂に楯津と云處に進み登美毘古と戰給ふの時五瀬命御手に登美毘古の痛矢串を負給ふ其時詔く吾は日神の御子

と爲て。日に向ふて戦こと良からず故に賤奴か痛手を負と宣ふこと古事記に見ゆ。又書紀に用明天皇即位の御時の詔に酢香手姫皇女を以て伊勢神宮に拜し日神の祀を奉ぜしむとあれば天照大御神を日神と稱奉ると記紀二書を以て證すべし。徴古新編に曰く。日神とは後に天日を所治食べき大御神なるによりてるか云り。又曰く。月神は其光彩日神に亞りとあれば。此神も天照大御神に亞で明麗く坐しつる謂は其心掟温順平和にして。清淨潔白ましゝかは衆神其徳化を合せ給へりしかば。其御體にも自然に光輝も増り坐けん。さればこそ永遠に此地球と太陽との中間なる月球を所領すべく委任し給ひて。永く地球の補翼と成さしめ給ひつるなれ。月山神社は羽前國東田川郡月山に在り。月讀命を祀る。延喜制名神大社に列し現今官幣中社たり。

○星神

天皇天常立尊

天帝天御中主尊

天常立尊は理を主り天御中主尊は陽を主る。

天皇地常立尊

天帝豊御地主尊

天王天八降魂尊

水星水行の運を主る

天神なり。

天帝角龍尊

天后丹蛇尊

天王天三降魂尊

木星木行の運を主る

此耦生の神に副坐る別天神なり。

天帝海道根尊

天后洲道根尊

天王天五十合魂尊

土星土行の運を主る

此耦生の神に副坐る別天神なり。

天帝大富道尊

天后大富邊尊

天王天八百日魂尊

火星火行の運を主る

此耦生の神に副坐る別天神なり。

天帝面足尊

天后惶根尊

天王天八十萬魂尊

金星金行の運を主る

此耦生の神に副坐る別天神なり。

天帝天降雄尊

天后天降姬尊

高皇產靈尊

神皇產靈尊

地球五徳を主る

此耦生の神に副坐る別天神なり。

天神なり。

先代舊事本紀に曰く天祖詔て七代皇帝天諸尊等厥功甚た大なり。天御中主尊は天の正中に在て天旋軸と爲り旋廻て世を持し。地常立尊は其聯首と爲り其角龍尊海道根尊大富道尊面足尊天降雄尊は中天極に連聯在坐て須らく悉に天地を知るべし。吾は其極内に在て天地長皇と爲り當に永く天を治むべしと宣ふ。徵古新篇に曰く舊事紀の古傳によりて文を成せば。

第一 國之常立神

海王星

第二 豐雲野神

天王星

以上獨神にして隱身に坐は以下の例に異なるべし。

第三 宇比地邇神妹須比智邇神

土星

此耦生の神に副坐る別天神あり是を天八降神といふ。本書には豊國主尊の下にあるは誤傳なりと思ゆれば此處にあるべきなり。

第四

角杙神妹活杙神

木星

此耦生の神に副坐る別天神あり是を天三降神といふ。

第五

意富斗能地神妹大斗能辨神

水星

此耦生の神に副坐る別天神あり是を天合神といふ。

第六

淤母陀琉日子神妹淤母陀琉比賣神

火星

此耦生の神に副坐る別天神あり是を天八百日神といふ。

第七

阿夜訶志古泥神妹阿夜訶志岐神

金星

此耦生の神に副坐る別天神あり是を天八十萬魂神といふ。

第八

伊邪那岐神妹伊邪那美神

地球

此耦生の神に副坐る別天神あり是を高皇産靈神といふ。

以上徴古新篇の説なり八個の游星は地文學又天之御中主尊又の名は天心尊とも稱奉れば或は天心星を主宰し給ふ神ならんも計り難し。又太陽の上には大眞星と云ふ一大星ありとも云へり。葦牙彦舅尊は天心星を公運する太陽の大軌道に係りて。遅速無く曲折無く幾千萬歳を経るとも凝滞無く旋轉せしむる事を掌る神に坐すべし。又天之常立神は彼別天の退立限り。天壁立極み大軌道の中間を保護し墜る事無く崩る事無く堅石に常石に知食す神に坐は亦の名を底立神と云ふと言へり。

凡そ天の現象地の形質は神靈發現して其變遷化育を主宰するはなし故に諸天神は諸星の公轉私轉を常恒不易に主宰し給ふこと最も靈異に貴き限りにこそ。

○北斗星神

- 第一 天八降魂尊 樞星を主る
 - 第二 天三降魂尊 璇星を主る
 - 第三 天五十合魂尊 璣星を主る
 - 第四 天八百日魂尊 權星を主る
 - 第五 天八十萬魂尊 玉衡星を主る
 - 第六 高皇産靈尊 開陽星を主る
 - 第七 神皇産靈尊 搖光星を主る
- 先代舊事本紀に曰く天祖詔く獨化七代天王尊等其功大なり天八降魂尊は天斗の首と爲り次第聯坐して神皇産靈尊は天斗の

尾と爲り生氣命根を主り天地の法式を知り善を作には富壽惡を作には天貧皆悉く議り定めよと宣ふ。

○二十八宿神

- | | |
|-------------|-------------|
| 浮船神 箕宿を主る | 飛鳥神 尾宿を主る |
| 神風神 心宿を主る | 神雷神 房宿を主る |
| 大鳥神 氏宿を主る | 小鳥神 亢宿を主る |
| 野槌神 角宿を主る | 以上東方七神なり |
| 時主大兒神 軫宿を主る | 神高見神 翼宿を主る |
| 片山野神 張宿を主る | 澄水吉見神 星宿を主る |
| 道祖兒玉神 柳宿を主る | 彦魂主神 鬼宿を主る |
| 井筒守神 井宿を主る | 以上南方の七神なり |
| 時守神 參宿を主る | 酒守神 觜宿を主る |
| 浦上神 畢宿を主る | 勝雄神 昴宿を主る |

瀧祭神 胃宿を主る 鳥野多神 婁宿を主る
 澤邊水神 奎宿を主る 以上西方の七神なり。
 齋幡多尾神 壁宿を主る 忌部神 室宿を主る
 海原神 危宿を主る 萬雄神 虚宿を主る
 磐根神 女宿を主る 大和山神 牛宿を主る
 下津神 斗宿を主る 以上北方の七神なり。
 以上諸神記に載る所なり。

○木神

久久能智神

○草神

鹿屋野比賣神

伊邪那岐伊邪那美二神既に國を生み更に神を生み給ふ次に坐す神の名は久久能智神次に坐す神の名は鹿屋野比賣神亦

の名は野槌神と云ふ(古事記)

久久は即ち幹なり。久久は枝葉のこもる所なり。鹿屋野は草の
 靡きしなぶ事を云。此神生出坐て木草を主宰給ふなり。日本書
 紀に次に木祖句句廻馳を生み次に草祖草野姫亦の名は野槌
 を生むとあり。

○風神

級長津彦命

級長戸邊命

伊弉諾尊と伊弉册尊と共に大八洲國を生み給ふ。然後伊弉諾尊
 の曰く。我が生める所の國唯朝霧のみ有りて。薰満るかなと宣ひ
 て。乃ち吹撥ふ氣神と化る。號て級長戸邊命と云ふ。亦是級長津彦
 命と云ふ。是風神なり(日本書紀)

古事記には伊邪那岐伊邪那美二神風神を生坐す名は志那都

比古神と云ふ。

風神は大和名所圖會龍田風神祭の祝詞を考るに昔崇神天皇の御宇に龍田に降臨し給ひ天皇の御夢に我名は天之御柱命國之御柱命と悟奉り吾宮は龍田の立野に定めて吾前を祀らば天下の公民の作と作物は五穀を始め草の片葉に至るまで成幸ひ給ふと悟し奉る教の如く宮柱を其處に定め給ふと見えたり龍田神社は大和國平群郡立野村に在り風神天御柱神國御柱神を祀る此神も亦沱風を防遏し五穀を成熟し給ふを以て恒祭以下臨時奉幣の如き廣瀨神社と同日に之を行へり現今官幣大社に列す。

○火神

火産靈神

○金神

金山毘古神

金山毘古神

金山毘賣神

○土神

波邇夜須毘古神

波邇夜須毘賣神

○水神

彌都波能賣神

伊邪那美命火之夜藝速男神を生む亦の名は火之炫毘古神と謂ふ亦の名は火之迦具土神と謂ふ此子を生み給ふに因て美蕃登炎れて病臥せり多具理邇生坐る神の名は金山毘古神次に金山毘賣神次に尿に成坐る神の名は波邇夜須毘古神次に波邇夜須毘賣神次に尿に成坐る神の名は彌都波能賣神と云ふ(古事記)火産靈神又の名は火之夜藝速男神又の名は火之炫毘古神又

の名は火之軻遇突智神と云ふ。日本書紀一書には吐爲す此神と化る。名を金山彦と曰す。小便神と化る。名を罔象女と曰す。大便神と化る。名を埴山媛と曰すと云。延喜式に伊豆國田方郡火牟須比命神社あり。紀伊國名草郡香都知神社あり。南宮社は美濃國不破郡宮代村にあり。原仲山金山彦神社と稱して。神金山彦命を祀る。延喜の制名神大社に列し。後本國の一宮と稱す。現今國幣中社たり。

玉手襪に曰く。志那都比古志那都比賣神は。風と共に成坐して。其靈なるが。即その風を司り給ひ。火産靈神は。火と共に生坐して。其靈なるが。即その火を知り給ひ。金山比古金山比賣神は。金と共に成坐して。其靈なるが。即その金を司り給ひ。彌都波賣神は。水と共に生坐して。其靈なるが。即その水を知り給ひ。埴安毘賣神は。埴と共に成坐して。其靈なるが。即埴と土を司り給ふ。此

五神を姑く號けて。五元神と申す。其は萬物盡く此五神の元靈に洩る事の無ればなり。

○方位神

天水建大秋津彦神
地水建小秋津媛神

此神は吉備前國一宮に在り。是世界を潤す威徳有る元神なり。此二神は水方神なり。北方を掌り給ふ。

天風木別忍動雄神
木來來匿道神

此二神は木方神なり。東方を掌り給ふ。

大戸日別神
天吹止男神

此二神は火方神なり。南方を掌り給ふ。

大垣安主神

成土女神

建土男神

石土彦神

石沙媛神

此五神は土方神なり。中央を掌り給ふ。

大事忍雄神

大屋忍雌神

此二神は金方神なり。西方を掌り給ふ。

以上先代舊事紀に載る所。此十三神は五方を掌る神なり。

○雨神

高龍神

閻龍神

伊弉諾尊劍を抜て。軻遇突智を斬て三段と爲す。其一段は是雷神

と爲る。一段は是大山祇神と爲る。一段は是高龍と爲る。復劍の

頭より垂る血激越て神と爲る。號て閻龍と曰ふ。日本書紀一巻

古事記には。御佩せる十拳の劍を抜て其子迦具土神の頸を斬

給ふ時。御刀の手上に集る血。手候より漏出て成る所の神の名

は閻淤加美神と云ふ。

古事記傳に。閻淤加美神は龍にて雨を物する神なり。書紀に高

龍と云ふもあり。そは山上なる龍神。この閻淤加美は谷なる龍

神なり。

丹生川上神社は大和國吉野郡丹生村に在り。高龍神閻龍神を

祀る。元と丹生河の上に鎮座せしを以て之を丹生川上社と稱

し。又雨師神とも稱す。傳へて天武天皇白鳳四年に祀る所なり

と云ふ。炎旱霖雨の時は。貴船神社と共に奉幣を爲すの例あり。

現今官幣大社に列す 貴船神社は山城國愛宕郡貴船村に在り。高靈神を祀る。延喜の制名神大社にして後に二十二社の一と爲り現今官幣中社に列す。

○雷神

火雷神

鳴雷神

伊邪那美神は火神を生給ふに因て遂に神避坐す。於是伊邪那岐命其妹伊邪那美命を相見んと欲して黄泉國に追往給ふ。其妹殿騰戸より出向ふの時伊邪那岐命語ひ詔はく愛しき我那邇妹命吾と汝と作る所の國未だ作り竟ず故に還りまささね爾伊邪那美命答て白はく悔きかな速く來らざる吾は黄泉戸喫と爲る。然に愛しき我那勢命入來り坐の事恐し。故に還んと欲す。且具に黄泉神と相論はん。我を視ること莫れ。如此白して其殿内に還り入り

給ふの間甚久うして待ち難し。故に左の御美豆良に刺給ふ。湯津津間櫛の男柱一箇を取り闕て一火を燭し入て見給ふの時宇士多加禮斗呂呂岐豆頭には大雷居り。胸には火雷居り。腹には黒雷居り。陰には拆雷居り。左の手には若雷居り。右の手には土雷居り。左の足には鳴雷居り。右の足には伏雷居り。並に八雷神成り居り

き(舌事記)

大雷とは烈しき雷なり。火雷とは今云ふ雷なり。落雷する時は樹木家屋杯の焼る義なり。拆雷は物を拆く義なり。落雷すれば樹木杯を拆くなり。黒雷とは暗きなり。雲雨を起して暗くなるなり。若雷とは勢の強き義なり。若雷土雷は一の義にして勢ひ強く地の震ふを云ふ。伏は吹の誤にて鳴雷吹雷は暴風大雨を起す義なり。是れ火神軻遇突智神の靈に依て成る所なり。日本書紀一書に伊弉諾尊之を視給ひ驚て走り還り給ふに雷等皆

起て追來る時に道邊に大桃樹有ければ其樹下に隠れて其實を採て雷等に擲給へば雷等は皆退き走りけり此桃を用ひて鬼を避ぐの縁なりと云ふ所謂八雷とは首に在るを大雷と云ひ胸に在るを火雷と云ひ腹に在るを土雷と云ひ脊に在るを稚雷と云ひ尻に在るを黒雷と云ひ手に在るを山雷と云ひ足上に在るを野雷と云ひ陰上に在るを裂雷と云ふとあり今は火雷と鳴雷との二神を掲上るなり 延喜式に山城國乙訓郡坐火雷神社とあり 又和泉國大鳥郡火雷神社あり 又上野國那波郡火雷神社あり 又大和國高市郡鳴雷と伊吹雷とを一つに祭る社ありと云ふ。

○山神

大山津見神

伊邪那岐伊邪那美二神山神を生む大山津見神と名く(古事記)

伊弉諾尊と伊弉册尊と共に大八洲を生む又海神等を生む少童命と號く山神等を山祇と號く(日本書紀一書) 大山祇命天に升りて天祖に謁し詔を奉じて山に國寶を出すことを掌るを得るを以て天降りて伊豫國に至り其一宮に鎮座す。

(先代舊事紀)

大山祇神社は伊豫國越智郡三島宮浦に在り故に又稱して三島大明神と云ふ大山積神を祀る延喜の制名神大社に列し後本國の一宮と稱し現今國幣中社たり。

○岩神

磐長比賣神

天津日高日子番能邇邇藝能命笠沙の御前に麗しき美人に遇給ひ爾ち誰の女ぞと問給へば答て大山津見神の女名は阿多都比賣亦の名は木花之佐久夜毘賣と謂ふ又汝兄弟有りやと問給へ

ば我姉石長比賣在りと答ふ。詔はく吾は汝に目合せんと欲す。答て白さく。僕は白すことを得ず。僕が父大山津見神將に白さんとす。故に其父大山津見神に乞ひ遣はし給ふの時。大に歡喜て其姉石長比賣を副て百取の机代の物を出し奉る。故其姉は甚だ凶醜に因て見畏みて返送り。其弟木花之佐久夜毘賣を留めて以て一宿婚を爲す。爾大山津見神石長比賣を返し給ふに因て大に恥て白し送り言はく。我が女二人竝奉る由は石長比賣を使しては。天神の御子の御命は雪零風吹と雖も恒に石の如くにして常磐に動かす坐せ。亦木花之佐久夜毘賣を使しては。木花の榮ふる如く。榮坐せと宇氣比旦貢進りき。此に今石長比賣を返して獨り木花之佐久夜比賣を留る故に。天神の御子の御壽は木花の阿摩比能微坐なんと白しき(古事記)

玉手襪に曰く。神名式に伊豆國加茂郡に伊波乃比咩命神社と

載され。文徳天皇紀に嘉祥二年十月壬子。伊豆國石奈比咩命神授從五位上とあり。抑この比賣神の出自は伊邪那岐大神かの火神迦具土神を三段に斬給ひし其一段に生坐る。大山祇神の御女なるが弟姫を木花之佐久夜毘賣命と申す。偕此二女の御名石も木も主と山の物にて父神に縁ありと有り。又石長比賣は岩の精神にまし。佐久夜毘賣は櫻の精神に坐こと著明に知られたりと云ふ。

○海神

- 大綿津見神
- 底津綿津見神
- 中津綿津見神
- 上津綿津見神
- 底筒之男命

中筒之男命
上筒之男命

伊邪那岐伊邪那美二神海神を生む。名は大綿津見神と曰ふ(古事記)
伊邪那岐大神詔曰く。吾は伊邪那志許米志之米岐穢き國に到りて
在り。故吾は御身の禊を爲んと宣ひて。竺紫の日向の橘の小門
の阿波岐が原に到り。禊祓給ふ。於是上瀬は瀬速く。下瀬は瀬弱し
と詔こらて。初て中瀬に隨迦豆伎て。滌ぎ給ふ時に成坐る神の名
は八十禍津日神。次に大禍津日神。此二神は其穢繁國に到るの時。
汚垢に因て成る所の神と云ふ者なり。次に其禍を直さんと爲て
成る所の神の名は神直毘神。次に大直毘神。次に伊豆能賣神。次に
水底に滌給ふ時に成る所の神の名は底津綿津見神。次に底筒之
男命。水中に滌給ふ時に成る所の神の名は中津綿津見神。次に中
筒之男命。水上に滌給ふ時に成る所の神の名は上津綿津見神。次に

に上筒之男命(古事記)

枉津とは枉は直からざるものを云。世の開くるは善のみに非
ず。故に禍神を生て幸あらしむるなり。是れ必ず善あれば悪
あり。悪あれば善あるの道理なり。善惡相交りて始めて人間の
生るに至るなり。直日とは正しき義なり。世の中の總ての順序
は禍ありて次に善あるは其理なり。伊豆能賣は美麗の義にて。
二直日と同じ幸福に坐す神なり。綿津は渡る義にて。海なり。底
筒之男。中筒之男。上筒之男は。水底に滌ぎ。水中に滌ぎ。水上に滌
ぎて。生出給ひし神なり。前の禍神直神は汚によりて生坐る神
なれども。此六神は全く禊祓の功により清くなりたる時に生
れたる故に禊の神とも云なり。日本書紀一書には。枉津日直日。
底津少童。表中津少童。表津少童。に作れり。
底筒男神は。底津宮に住りて國の基を守り給ふ。中筒男神は。中

津宮に住りて。海の萬寶を出し給ふ。表筒男神は。表津宮に住りて。諸の龍神に命し。風雨を以て時に順ふことを掌り給ふ。昔時神功皇后に神託ありて。征韓の機會を教へ給ひ。三韓征伐には。神體を現はし。皇軍を守り導き。大勝を得させ給ふ。靈德に坐す大神なり。住吉神社は。長門國豊浦郡山田村に在り。神功皇后三韓を征討し給ふ時。表筒男神。中筒男神。底筒男神。三神御船を守護し。軍に従ふ。凱旋の後。皇后に神託あり。我荒魂は。穴門の山田邑に祭らしめと宣ふ。即ち神託によりて。祠を今の長門の山田邑に立て。其荒魂を祭る。即ち本社なり。延喜の制。三座竝に名神大社に列し。後本國の一宮と稱し。現今國幣中社たり。住吉神社は。攝津國住吉郡住吉に在り。底筒男神。中筒男神。表筒男神。の三座を祀り。後に神功皇后を合せ祀りて。四座とす。底筒男神。中筒男神。表筒男神の三神は。皇后の新羅征伐の時。皇軍を導き給

ひし神にして。凱旋の時。皇后に神託あり。吾和魂は。宜く大津渚中倉の長峽に居るべし。往來の船を看んと宣ふ。因て神教の隨に其地に社を造りて。鎮祭す。現今國幣大社に列す。古來此神は。海路を守り給ふと稱して。航海者は。大に尊敬し。又中古以來。和歌の神と稱して。詠歌者流の尊信するもの頗る多し。沼名前神社は。備後國沼隈郡鞆町に在り。綿津見神を祀る。現今國幣小社たり。海神社は。播磨國明石郡垂水村に在り。底津綿津見命。中津綿津見命。表津綿津見命を祀る。延喜の制。名神大社に列し。現今國幣中社たり。

○浦神

大倉主

菟夫羅媛

仲哀天皇。筑紫に幸し給ふ時に。岡縣主熊罥。周芳沙歷の浦に參迎

六〇
へ奉る。既にして海路を導き。山鹿岬より廻りて。岡浦に入り。水門に到るとき。御船進むことを得ず。則ち熊罥に問て曰く。朕聞く汝熊罥なる者は。明心有り。以て參來ると。何ぞ船の進まざるや。熊罥奏して白さく。御船の進むことを得ざる所以の者は。臣が罪に非ず。是浦口に男女二神有り。男神を大倉主と曰す。女神を菟夫羅媛と曰す。必ず是神の心ならんか。天皇則ち之を禱祈し給ふ。挾抄者倭國菟田人伊賀彦を以て祝と爲し。祭らしめ給へば。則ち御船進むことを得る。(日本書紀)

○島神

生島神

足島神

延喜式。生島御巫祭神二座。生島神足島神

古語拾遺に。生島は。是大八洲の靈とありて。今難波なる。生魂神

社にて。即伊邪那岐伊邪那美二神の大八島國を産成し給へる。神靈なり。故に其御功績を稱へて。生島足島。又生國足國神と白すなり。生國魂神社は。攝津國東成郡生魂に在り。亦難波大社と稱し。後世専ら生玉社と稱す。現今官幣大社たり。

○水戸神

速秋津日子神

妹速秋津比賣神

伊邪那岐伊邪那美二神。既に國を生み。更に神を生む。次に海神を生む。名は大綿津見神。次に水戸神を生む。名は速秋津日子神。妹速秋津比賣神。(古事記)

○水分神

天之水分神

國之水分神

速秋津日子速秋津比賣二神河海に因て持別て生る神の名は沫那藝神次に沫那美神次に頼那藝神次に頼那美神次に天之水分神次に國之水分神(古事記)

籠神社は丹後國與謝郡府中村に在り天之水分神國之水分神を祀る延喜の制名神大社に列し本國の一宮と稱す現今國幣中社たり。

○道神

道之長乳齒神

長道磐神

道俣神

岐神

伊邪那岐大神詔曰く吾は伊邪志許米志之米岐穢國に到て在けり故吾は御身の禊を爲んと宣ひ竺紫日向の橘の小門の阿波岐

が原に禊祓給ふ故御帶を投棄給ふに成坐る神の名は道之長乳齒神御禪を投棄給ふに成坐る神の名は道俣神(古事記)

伊弉諾尊己に泉津平坂に至り給ふ便ち千人所引磐石を以て其坂路を塞て伊弉册尊と相向つて立ち遂に絶妻の誓を建る因て此より過ること莫れと宣ひて即ち其杖を投ち給ふ是を岐神と

謂ふ又其帶を投ち給ふ是を長道磐神と謂ふ(日本書紀一書) 經津主武甕槌二神出雲に降到る大己貴神乃ち岐神を二神に薦

て曰く是れ當に我に代りて從ひ奉るべし故に經津主神は岐神を以て嚮導と爲し周流て削平す逆命者は即ち斬戮を加へ歸順者は褒美を加ふ(日本書紀一書)

○道祖神

天來人去者道神

地來人去者道神

天來人去者道神。地來人去者道神。此二神者道祖神也。(先代舊事紀)

○市神

大市姫神

須佐之男命又大山津見神の女名は大市比賣を娶りて御子大年神次に宇迦之御魂神を産み給へり(古事記)

神徳略述頌に曰く市塵守護は大市姫なり。大市姫は大山祇の女にして素戔嗚の妃なり。古事記に見ゆ。今京都に市姫社有り。市店の守護神と爲す。蓋此神なり。

○國土修理神

大物主神

大國主神亦の名は大物主神亦は國作大己貴命と號す亦は葦原醜男亦是八千矛神亦は大國玉神亦は顯國玉神と曰す嘗て大己貴命少彥名命に謂て曰く吾等が造る所の國豈に善く成せりと

謂んや少彥名命對て曰く或は成る所あり成さざる所あり蓋し幽深の致あらん其後少彥名命行て熊野の御碕に至る遂に常世の郷に適ましぬ是より後は國中に成ざる所は大己貴神獨能く巡り造り給ひ遂に出雲國に到て乃ち興言して曰く夫の葦原の中國は本より荒芒たり磐石草木に至るまで成く能く強暴なり。然れども吾己に摧伏て和順ならざるはなし遂に因て言ふ今此國を理る唯吾一身のみなり其れ吾と共に天下を理る者蓋し之あらんや時に神光海を照し忽然として浮び來る者あり曰く若吾在らずば汝何んぞ能く此國を平げんや吾在るに由ての故に汝其大造の績を建ることを得たり是時大己貴神問て曰く然れば汝は誰ぞ對て曰く吾は是れ汝が幸魂奇魂なり大己貴神曰くしかり廼ち汝は是れ吾が幸魂奇魂今何處に住んと欲す對て曰く吾は日本國の三諸山に住んと欲す故即ち宮を彼處に營て就

て居坐しむ此大三輪神なり(日本書紀一書)

崇神天皇の六年百姓流離して或は背叛する者あり七年春二月詔曰く昔我皇祖大に鴻基を啓き給ひ其後聖業逾高く王風盛なり不意き朕が世に當て數ば災害有んことを恐らくは朝に善政無く咎を神祇に取るか何ぞ神龜に命じて以て災を致の所由を極めざる是に於て天皇乃ち神淺茅原に幸して八十萬神を會て以て卜問給ふ是時に神明倭迹迹日百襲姬命に憑て曰く天皇何ぞ國の治らざるを憂るなかれ若し能く我を敬祭らば必ず平かなるべし天皇問て曰く如此教る者は誰の神ぞ答て曰く我は是れ倭國の域内に居る神名を大物主神と云ふ時に神語を得て教の隨に祭祀す然れども事に於て驗無し天皇乃ち沐浴齋戒して殿内を潔祈りて曰く朕神を禮こと尙未だ盡さざるか何ぞ享給はぬことの甚きなり冀はくは亦夢の教にて神恩を畢給へ是夜

の夢に一貴人あり殿戸に對立て自ら大物主神と稱へ曰く天皇復國の治らざるを愁ることなかれ是吾意なり若し吾兒大田田根子を以て吾を祭らしめ給ば則ち平かならん亦海外國あり自ら歸伏すべし秋八月倭迹速神淺茅原目妙姬穗積臣遠祖大水口宿彌伊勢麻績君三人共に夢を同くして奏して言さく昨夜の夢に一貴人有り誨て曰く大田田根子を以て大物主神を祭る神主と爲し亦磯市長尾市を以て倭國魂神を祭る神主と爲せ必ず天下太平ならむ天皇夢の辭を得て益す心に歡び給ふ布く天下に告給ひて大田田根子を求む即ち茅渟縣陶邑に於て大田田根子を得て之を貢る天皇曰く朕當榮樂むべし乃ち大田田根子を以て大物主神を祭る神主と爲し又長尾市を以て倭大國魂神を祭る主と爲し仍て天社國社及び神地神戸を定め給ふ於是疫疠始て息み國內漸に謐り五穀既に成り百姓饒ひぬ(日本書紀)

大物主神は國土を經營し。國內を靜謐ならしめ疫病を治め。五穀を成熟し給ふ大神なり。官幣大社大神神社は。大和國城上郡三輪村の東三輪山に在り。一に三諸山と名く。即ち大物主神を祀る。此神又倭大物主櫛瓊玉命とも云ふ。故に合稱して大神大物主神社とも云ふ。太古大己貴神豐葦原中州を經營し。其功既に成るに及びて自ら其幸魂奇魂を三諸山に祀る。是則ち大物主神なり。此社は諸神社中最も舊き神社にて。延喜の制名神大社に列し又二十二社の一にして本國の一の宮と稱す。

○國魂神

大國魂神

大國魂神活須毘神の女伊怒比賣を娶て生る御子大國魂神古事記傳に曰く。何神にまれ國を經營坐し功德あるを。其國々

にて國魂とも大國魂とも申して拜み祀るなり。故諸國に某大國御玉神社と云多し。然るに此は何國ともなきは倭の大國魂なり。此神大穴牟遲神を助けて。殊に倭國を經營坐し功德ぞ有けむ。かくて倭は天皇命の靜坐す御國となりて。他と異なれば。國名をば申さずして。ただに大國御魂と申し。又大倭大神とも申して。皇朝の尊崇坐すことも。殊に重かりしなりけり。大和神社は。大和國山邊郡新泉村に在り。六年神の御子大國魂神を祀る。相殿二座あり。大倭神社註進狀に。八千矛神御歳神とす。又腋上池心宮に天下知食す孝昭天皇の元年秋七月。天皇御夢に一貴人有りて。殿戸に對立ち自ら大己貴命と稱し。我和魂は神代より三諸山に鎮りて。神器の昌運を助く。荒魂は王身に服ひて。大殿の内に在りて。寶基の衛護を爲すと宣ふ。乃ち神教を得て。天照大神と大國魂神と共に皇居の内に祀り給ふ。其後

崇神天皇の六年に至りて、神威を瀆さんことを畏れ給ひて、淳名城入姫命をして始て大和年市磯邑に鎮祀らしむ。是を此社の起原とす。延喜の制名神大社に列し、現今官幣大社なり。大國魂神社は武藏國多摩郡府中に在り。又六所宮と云ふ。人皇第十二代景行天皇の四十一年五月五日大神形を現し告て曰く、吾は是れ大國魂大神なり。祠を茲に立て能く吾を祭れ。吾を祭らざれば、則ち四海安靜ならずと宣ふ。郷民等神宣に依て、神籬を營建して、大國魂神社と號す。是其起原なり。現今官幣小社たり。

○地主神

猿田彦神

天津彦彦火瓊瓊杵尊葦原中國に天降り給はんとする時、先つ天鈿女命に勅して往て衢神に問しむ。衢神對て白す。天照大神の御

子今當に降り給ふと聞く。故に奉迎して相待つ。吾名は猿田彦神なりと云ふ。天鈿女命復問ふ。汝は我に先だちて行んや。將た我れ汝に先だちて行んや。猿田彦神吾先ちて啓行せんと對ふ。天鈿女命復問ふ。汝は何處に到るや。皇孫は何處に到坐んや。猿田彦神對て白す。天神の御子は則ち筑紫日向高千穂穗觸の峰に到坐べし。吾は伊勢の狹長田五十鈴川上に到るべしと白す。日本書紀一書大年神又猿田彦命と名づく。又知國歲命と名づく。此神は最も威靈有る神なり。能く人に壽福を授與ふ。故に之を號て太田神と曰ふ。亦能く人の魂魄を反す。故に之を號て興玉神と曰ふ。此乃ち五十鈴川の地主神なり。而して皇大神宮の西北隅大地輪の中臺に之を奉祀す。兎代舊事本紀

伊勢國二社三宮鎮座略記に曰く。伊勢國磯部郷五十宮の西南八町に飯井社あり。中の大殿は皇祖磐余彦大神左の大殿は猿

田彦大神右の大殿は天鈿女大神を祀る 延喜式頭注に曰く大和添上郡穴吹猿田彦命なり 猿田彦神は皇孫降臨の時に主として迎へ奉り啓行し給ふ神なれば之を地主神と申すか今山城國紀伊郡深草村に鎮座する稻荷神社は倉稻魂命素戔鳴尊大市姫命三座を祀る由に聞えつるも二十二社註式には稻荷社下社は大宮女神是は大市姫命なるべし中社は倉稻魂命播百穀神なり一名豊宇氣姫命大和國廣瀨大明神伊勢外宮同體の神なり上社は猿田彦神三千世界地主神是なりとあり延喜式頭註には本社倉稻魂神一座素戔鳴一座大市姫なりとあり秦山集に曰く延喜式に三座となす後世客神十禪師を加へて五座となす或は曰く客神は猿田彦命十禪師は瓊瓊杵尊なり是れ瓊瓊杵尊降臨の時天照大神の天津國なる狹田長田に蒔植まじし稻種を齋庭の穂と祝ひ清めて皇孫尊に授け

給ひしを持降り坐て此水穗の國に繁殖せしめ給ふ神慮の程の賢ければ猿田彦神は其降臨に先だちて啓行をなさんと參向ひ侍りければさては地主神と稱へ申すも其由ある事なるべしされば舊事紀は殊に異なる傳へなれども書紀の傳への如く伊勢の五十鈴川上に到坐ば即ち五十鈴川の地主神と申すならん又二十二社註式秦山集に就て考るに倉稻魂命は百穀を播る事を知食す神にて其神を生給ふは大市比賣なり素戔鳴尊は倉稻魂の父神にして此國土を知食し瓊瓊杵尊は齋庭の稻種を此國土に持降り給ふ神に坐し猿田彦神は瓊瓊杵尊を此國土に啓行して後に伊勢の五十鈴川上に到り止り坐ば共に此國土の保安と百穀播殖に縁あること亦疑ふべくもあらずされば猿田彦神を地主神と稱へ申すこと論なきを知るべし。

○治幽事神

大己貴命

經津主神武甕槌神出雲五十田狹の小汀に降り到りて大己貴命に問て曰く汝將に此國を以て天神に奉らんや否や對て曰く汝二神是れ吾處に来るに非ざるかを疑ふ故許すべからず於是經津主神則ち還り昇りて報告申す時に高皇產靈尊乃ち二神を還し遣して大己貴神に勅して曰く今は汝が言す所深く其理有り故更に條條に勅し給ふ夫れ汝が治る所の顯露の事は宜く是れ吾孫之を治むべし汝は則ち神事を治むべし又汝は應に天日隅宮に住るべし今當に造供んこと即ち千尋の栲繩を以て結て百むすび餘り八十紬にせん其宮を造の制は柱は即ち高く板は則ち廣く厚くせん又汝が祭祀を主どらん者は天穗日命是なりと宣ふ於是大己貴神報て曰く天神の勅教へ給ふこと如此慇懃な

り敢て命に従はざらんや吾が治る所の顯露の事は皇孫當に治め給ふべし吾は將に退いて幽事を治めん乃ち岐神を二神に薦て曰く是當に我に代て奉從ふべし吾將に此より避去んと云て即ち躬に瑞の八坂瓊を披て長隠れにき日本書紀一書

徵古新編に曰く此時天照大神高木神の神勅ありて顯露の事は皇孫命に言依し子孫長く繼承して人民を統御せしめ給ひ幽は大國主神に言依して八十萬神を率て長く幽政を司り顯露の政事をも幽より贊け守しめ給へるなりされば此時始て顯幽の分擔ありと雖も顯と幽とは物に影あるが如く相離るべきものに非ず相依り相贊けざるを得ざるは自然の道理なり大國主神は八十萬神を率る幽政を司り給ふには神々の分掌をも定められ善を賞し惡を懲し其他幽政の賞罰を正さるべし又神變不測の靈驗を現はし顯世の事業を輔け人民を助

け誠め給ふこともあるべし。
出雲大社は出雲國神門郡杵築町に在り。祭神は大己貴命にして後に素戔嗚尊を合祀す。神代の御契り弛ふ事なく社殿の構造廣大なるを以て大社と云ふ。現今官幣大社たり。

○五臟神

天元聖神命

此神は天照大神生氣を成す分魂を作し人の心臓を主る尊覺の神なり。

表通魄命

此神は肺臟を主り人體を守る神なり。

事振魂命

此神は肝臟を主り人業を守る神なり。

壽根靈命

此神は脾臟を主り人氣を守る神なり。

躬根精命

此神は腎臟を主り人胤を守る神なり。

○五境神

天道合命

此神は耳境を主る。

天日合命

此神は目境を主る。

天風合命

此神は鼻境を主る。

天氣合命

此神は口境を主る。

天人合命

此神は陰境を主る。

右十柱神は化を流き氣を配り先人の魂を攝し世間を成す神なり故に専ら此神を祭る今熊野宮に在る十王子社なり以上先代舊事本紀

天元聖神は皇天生活の氣を賦施して人の心臓を主宰し給ふ神なり心の神は元聖なり貴崇にして明悟なり故に尊覺の神と云ふ是れ大富道尊大富邊尊火徳を爲して神神を造り給ふものは天照大神の魂を分て之を造らしめ給ふが故なり凡そ世間の所有る生活靈覺は皆天照大神の生氣分魂なり表通魄神は面足尊惶根尊の金徳の分魂神なり肺は五臓に於て上を覆て蓋す故に表通と云ふ肺は金にして其色白し故に白魂と云ふ人の氣息は金なり皮膚も金なり皮を以て身を包み息を以て身を持す故に肺臓の神は人體を守と云ふなり

事振魂神は角機尊活機尊の木徳の分魂神なり事は事業なり振は動作なり是れ事業動作を主るを事振と云ふ肝は風木にして其色青し故に青魂と云ふ人軀の筋爪は風木なり一切の事業筋爪を以て力有り故に肝神は人業を守ると云ふなり壽根靈神は泥土炎尊沙土炎尊の土徳の分魂神なり壽は年齒なり根は根本なり壽齒の根本を主るを壽根と云ふ脾は土なり故に黃魂と云ふ脾は食物を納て氣血を養ふ血隆なる時は氣盛んなり故に脾神は人氣を守と云ふなり躬根精神は國常立尊豐御地主尊の水徳の分魂神なり此二神精神腎膀を造り給ふ水は天地の本なり精は人躬の根なり故に躬根と云ふ腎の氣は水故に黒魂と云ふ精を以て人を生ず故に精神は人胤を守と云ふなり天道合神は八百日魂尊の分魂神なり道は理にして三才萬物

共に由る所の者なり。合とは相會相和するなり。耳は心の化なり。耳を以て理音を聞き心神道に和合す。故に耳境の神を道合と云ふなり。

天日合神は三降魂尊の分魂神なり。人の眼目は日月の如し。目は神の化なり。肝の竅なり。神火の精なり。故に目境の神を日合と云ふなり。

天風合神は八十萬魂尊の分魂神なり。鼻は息風あり。故に鼻神を風合と云ふなり。

天氣合神は五十合魂尊の分魂神なり。氣は元氣にして。一身に満る者なり。人の氣血を生ずるは。皆食を以て之を助く。口は脾の竅なり。故に口境の神を氣合と云ふなり。

天人合神は八降魂尊の分魂神なり。人の生ずるときは。皆陰門より産る。故に陰境を主る神を人合と云ふなり。

右元聖神神より天人合神に至るまで。凡て十神なり。十五柱の尊神。神氣流化して十神と爲る。氣を五臟五境に配して神と成るなり。先人とは死没の者を云ふ。人死すれば。即ち其五臟五境を攝て。又後人の魂を成生し。人生を相續して。世間を成就する神なり。故に専ら此神を祭るとは。人人己己の魂神を云ふなり。

○鎮魂神

- 神産日神
- 高御産日神
- 玉積産日神
- 生産日神
- 足産日神
- 大宮能賣神
- 御食津神

事代主神

延喜式神名神祇官西院坐御巫祭神八座

徵古新編に曰く先彼八神の中に前の五座は皇祖なり後の三座は天孫降臨の際に配祀せられたる神なるべし。そは近世に至りて直日神をも加へて九座となりつるにても知るべし。さて五座は玉積産日神を中第一座とす。是則天御中主神なり。其順序は

- 神産日神 第三座
- 高御産日神 第二座
- 玉積産日神 第一座
- 生産日神 第四座
- 足産日神 第五座
- 大宮能賣神 第七座

御食津神

第六座

事代主神

第八座

延喜式神名帳には片端より記されたりと思ゆるは神産日を第一に擧たるを以ても知べし。高御産日神神産日とあるべきに然らぬは徵とすべきなり。また後座なる御食津は受持神にて乃ち豊受姫大神なれば大宮賣の次にあるべきに非ず。此二義を推ても其順序の斯在ざるを得ざる事を察るべきなり。さて前座の中に生産日足産日とあるは伊邪那岐伊邪那美の神なり。そは式に生島御巫祭神二座。生島神足島神とあるにて論なきを古語拾遺に生島是大八洲之靈とありて。今難波なる生魂神社にて即伊邪那岐那美二神の大八島國を産成し給へる神靈なり。故に御功績を稱へては生島足島又生國足國神と白し。鎮魂の爲にも産靈の御功德あるを以て伊邪那岐命を生産

靈伊邪那美命を足産靈とは稱へ奉れるなり。さて天御中主神を玉積産日として。鎮魂の第一座に鎮祭れるはいかにといふに。此神全世界の大主宰と坐て。大にしては造物造化の元靈を司り小にしては各人の靈魂を司り給へる大御神なり。そは類聚國史に靈産魂尊と見え。上宮太子拾遺記。また姓氏錄。右京神別に。天靈神と見え。又元々集に。天御靈神と見えたるにて。天津御靈神とも稱へ奉り。又丹生祝氏籍記に。天魂尊と見え。又神皇實錄に。天御中主尊元氣所化名天御靈神と見えて。神祇拾要に引圖書寮記に。正しく阿米廼武須毘乃加微と見え。又熊野古文書に。玉留魂天御中主尊あるなどを思ひわたせば。玉積産日は。天御中主神なる事明著なり。さて神名式に。玉積古語拾遺に。魂留とあるは共に借字にて。鎮魂の義なり。然ば此大神の靈德に依りて。靈振の神事起りて。靈魂を鎮るが故に。鎮魂祭の主神と

して五座の中央に祭鎮たる所以を知べきなり。

○護夫婦好合神

天花開姬命

木花開哉姬尊

天花開姬命降て伊豆國に鎮坐す。木花開哉姬尊降て箱根山に鎮坐す。俱に夫婦好合を護るの神なり(先代舊事紀)

淺間神社は駿河國富士郡大宮町に在り。木花開耶比咩命を祀る。延喜の制。名神大社に列し。後本國の一宮と稱す。現今官幣大社たり。又淺間神社は甲斐國東八代郡一宮村に在り。木花開耶比咩命を祀る。延喜の制。名神大社に列し。後本國の一宮と稱す。現今國幣中社たり。木花開耶姬は大山祇の女にて。此神は父神大山祇と同じく山を幸ふ神なり。駿河新風土記に。日本山路國の鎮とも坐祇かも寶とも成れる山かもと昔より

言繼來る。この山即ち神に坐ことは言も更なれど。人の代となりて鎮祭して官幣を奉る社は延喜式神名帳富士郡淺間神社とあり。又三代實錄に甲斐國司言す。往年八代郡暴風大雨雷地震あり。駿河富士大山西峰忽ち熾火あり。巖石を燒碎す。淺間神社託宣あり。此國の齋祭を得んと欲す。國吏の爲めに凶咎を成し。百姓の病死を爲す。然れども未だ覺悟せず。仍て此恠を成すと宣ふ。於是明神の願に依て貞觀七年十二月勅して甲斐國八代郡に淺間明神の祠を立つとあれば。此二社の鎮坐は皆靈山鎮護の爲めなること知るべきなり。又玉手襪に木花開耶姬は櫻の精神と云ふ。されば櫻は日本の名木にして富士は日本の靈山なれば。斯く神靈を住め給ふは論なきを。舊事紀の傳に。夫婦好合を護る神と云は。いかにと考るに。天花開姫も木花開耶姬も共に花の精神に坐し。木は男なり。花は女なり。花は木に

依て開き榮え。木は花に依て果實を成す。木と花とは離るべからず。男女好合こと斯の如くなれば。それを神徳に稱て夫婦好合を護る神なりと申すならんか。今は只舊事紀の傳の儘を記しぬ。

○壽命神

石長比賣神

天津日高日子番能邇邇藝能命。笠沙御前に麗美人に遇給ひ。爾誰女と問給ふ。答て白さく。大山津見神の女名は神阿多都比賣。亦の名は木花之佐久夜毘賣と謂ふ。又問給ふ。汝兄弟有るや。答て白さく。我姉石長比賣在り。古事記

玉手襪に曰く。石長比賣と申すは。堅石常石に長久き由なり。

○乞壽命神

泣澤賣神

伊邪那美命は火神を生に因て遂に神避坐故爾伊邪那岐命詔して曰く愛我那邇妹命か子の一木に易つるかと言て乃ち御枕方に匍匐ひ御足方に匍匐ひて哭き給ふ時に御涙に成る所の神は香山之畝尾木本に坐す名は泣澤女神なり(古事記)
泣澤賣神を乞壽命神徳に坐神とするは玉手襪に斯く説れけるを以て今は其傳に依て記しぬ。

○智慮神

津速産靈神

市千魂命

興臺産靈命

天兒屋根命

津速魂尊又御名は建魂尊男市千魂命男興登魂命孫天兒屋命(先代舊事紀)

代舊事紀

玉手襪に曰く津速産靈神の出自は誰神よりと云むに此は疑なく火産靈神なり其由は津速とは伊都速の伊の略き言るにて伊知速の伊を略き千早と云ふに同しければ御名の義は伊都速き方に卓れ坐る由なり天上に坐す神等の中に然る伊都速き神は火神を於きて誰神か有らむ其は此神を祭る詞に御心一速比給波志止爲豆云々と有をも思ふべし此神伊邪那岐大神に斬られ給ひしに其御體は天上に騰りて香山と化れること玉眞柱にも云る如くなれば其御靈やがて彼山に坐まし市千魂命は其御靈の御子に坐すと聞えたり故この命の名もまた親神の御名と同義なり其は市は伊知速の伊知にて伊都と云に同く千は比古遲の遲と同く男神の稱名なるにても知べし(興臺産靈神と申す興臺は本より借字にて心利の義なりこの思ひの靈妙なる功德を持給へるが故に産靈てふ御名

をも負坐る事と知られたりさて津速産靈神市千魂命興台産靈神と次々に火産靈の功業成々て兒屋根命に至りて思慮りの智全く備ひて石屋戸隱の大禍事を直し給へる功績の高く比類なきこと幽き因ある事なり。

天兒屋根命は河内國枚岡に鎮坐す枚岡神社なり現今官幣大社に列す又大和國添上郡奈良の東春日山の麓に鎮坐す春日神社の三御殿に祀る神なり現今官幣大社に列す延喜式春日祭の詞に鹿島坐健御賀豆智命香取坐伊波比主命枚岡坐天之子八根命比賣神四柱の皇神等の廣前に白さくとあるを以て知るべし。

○忍耐神

天忍日命

高皇産靈尊男天忍日命又御名は神狹日命(先代舊事紀)

此神は太玉命の次に生る神なり忍日とは忍は忍耐なり強なり含忍する所あるなり日とは火なり其性强勇に坐し能く含忍の徳あり火の炎熱と雖も耐忍ぶ故に忍日命と申なり天照大御神天の窟戸に入り給ふ時に高皇産靈尊此神を召て試に問給ふ汝は身の燃焦るゝをも忍べきや對て曰す丈夫何ぞ難とせんと乃ち窟頭に立て神軀を奉ぜよと命じ給ふ遂に天照大御神窟戸を開き給ひし時に天忍日命即ち神軀を奉じて懐き出し給ふ其時命の身は日神の御身の御氣に觸れて焼焦れて墨の如し然れども之に屈せず坐しけるを天尊感じ給ひて天太咒を以て之を咒給へば即ち癒て本の如しと云ふ。

○主中正徳神

八重言代主神

大國主神亦神屋楯比賣命を娶り生る子事代主神又天鳥航神建

御雷神出雲國の伊那佐の小濱に降到り。十掬劍を抜て浪穂に逆
 に刺立て其劍の前に踏み其大國主神に問て言く。天照大御神高
 木神の命を以て問使はし給ふ。汝の宇志波祁流葦原中國は我御
 子の所知國と言依せ賜ふ。故汝の心奈何と答て曰く。僕は得白さ
 ず。我子八重言代主神是白すべし。然れども鳥遊取漁して御大之
 前に住て未だ還り來ず。故に天鳥船を遣して八重言代主神を徵
 來して問賜ふの時其父の大神に語て言く。恐し此國は立どころ
 に天神の御子に奉り給へと言ひて即ち其船を踏傾けて天逆手
 を青柴垣に打成して隠れ給へり(吾事記)

事代とは事知の義なり。舊事紀に中正の徳を修る神とあり。そ
 をいかにと考るに凡て神は偏せず倚せず。過不及なく中正の
 靈徳に坐す事は論なきを別て其を知しめす事知の主たる神
 なるべし。さればこそ皇孫尊降臨の時にも疾く其精一の理を

知しめして。最先に御位を避給ふにても知るべし。斯く此神が
 爲す時は他の多くの神が皆従ひて違ふ神なしと云事あるに
 ても。中正の神徳の高く貴く坐す所以を伺ひ察るべし。事
 代主神は攝津國八部郡長田村に鎮坐する長田神社に祀る。昔
 時神功皇后新羅を伐て歸り給ふ時。皇后の船直に難波を指す。
 時に御船海中に廻りて進こと能はず。更に務古の水門に還り
 之をトひ給ひけるに。事代主神之に誨て。吾神を御心長田國に
 祀れと宣ふ。乃ち今の地に祭給ふ。現今官幣中社に列す。

○前進勇徳神

前魂神

神皇産靈尊男前玉命。前進の徳あり。勇徳を主る(先代舊事本紀)
 前玉神社は上總國長柄郡一宮村に鎮坐する。玉前神社に祀る。
 現今國幣中社に列す。

○武神

經津主神

武甕槌神

高皇產靈尊更に諸神を會て當に葦原中國に遣すべき者を選び給ふ。兪曰く磐裂根裂神の子磐筒男。磐筒女。生む所の子經津主神。是れ佳ならん。時に天石窟に住む神。稜威雄走神の子。武甕槌神。速日神の子。武甕槌神。有。此神進て唯經津主神のみ獨り丈夫にして吾は丈夫に非ずやと云ふ。其辭氣慷慨なり。故即ち經津主神に配て葦原中國を平けしむ。二神於是出雲國五十田狹の小汀に降到り。十握劍を抜て倒に地に植て其鋒端に踞み。大己貴神に問て曰く。高皇產靈尊皇孫を降して此地に君臨し給はんと欲す。故に先我二神を遣して駈除平定せしめ給ふ。汝意何如當に避べきや。不時に大己貴神對て曰く。當に我子に

問て然後に報せん。是時其子事代主神遊行して出雲國三穗の碕に在り。故に高皇產靈尊の勅を致して將に報せんとする辭を問ふ。時に事代主神使者に謂て曰く。今は天神此勅有り。我父宜く避奉べし。吾亦違ふべからず。因て海中に八重蒼柴籠を造りて船柁を踏て避けぬ。使者既に還りて報命す。大己貴神則ち其子の辭を以て二神に白して曰く。我怙し子だも既に避去ぬ。故に吾亦當に避奉べし。誰復敢て順はざる者あらん。乃ち廣矛を以て二神に授て曰く。吾此矛を以て卒に功を治ること有り。天孫若し此矛を用て國を治め給はゞ當に平安なるべし。今我將に隠れなんと云ひ訖て隠れ給ふ。於是二神諸の順はざる鬼神等を誅して果に以て復命す。日本書紀

經津主神は下總國香取郡香取町に鎮坐する香取神宮に祀る。 姫大神武甕槌神天兒屋命の三神を配祀す。現今官幣大社に列

す 武甕槌神は常陸國鹿島郡鹿島町に鎮坐する鹿島神宮に祀る。經津主神。天兒屋根命の二神を配祀す。現今官幣大社に列す。此社は古來朝廷の崇敬篤く。毎歲二月使を遣して幣帛を奉らしめ給ひ。藤原氏は氏神と稱して。立后任大臣等ある毎に。神寶幣帛を奉り。鎌倉將軍の如きも武神と崇めて尊信淺からず。屢神領を寄附せりと云ふ。

○行旅神

阿須波神

波比岐神

大年神。天知迦流美豆比賣を娶り生る子。阿須波神。波比岐神。古事記

玉手襪に。阿須波神。波比岐神は。人家の這入。また人の行く途中。を守る神と云へり。

○渡水神

鳥之石楠船神

大楫木戸媛神

伊弉諾尊。伊弉册尊。鳥之石楠船神を生む。又の名は天鳥船神。次に大楫木戸媛神を生む。此二神は水を渡る神なり。先代舊事本紀

○門神

八衢比古神

八衢比賣神

久那斗神

伊弉諾尊。黃泉國より逃歸り給ふ時。其杖を投ちて。此より以還雷敢て來ずと曰ふ。是を岐神と謂ふ。此本の號は來名戸之祖神と云

ふ。日本書紀一書

道饗祭祝詞に。大八衢に湯津磐村の如く塞坐す。皇神等の前に申

さく。八衢比古。八衢比賣。久那斗と御名は申て辭竟奉らくは。根國底國より龜ひ疎び來物に相率相口會事无くて。下行ば下を守り。上往ば上を守り。夜の守日の守に守奉れ云々。

玉手襪に三柱は門を守りて惡き鬼を逐ひやり給ふ神と云ふ

櫛石窓神

豐石窓神

天石戸別神亦の名は櫛石窓神と謂ふ。亦の名は豐石窓神と謂ふ。

此神は御門の神なり(古事記)

延喜式神名に山城國葛野郡天津石門別稚姬神社。大和國高市

郡天津石門別神社。攝津國島下郡天石門別神社。陸奥國白河郡

伊波止和氣神社。丹波國多紀郡櫛石窓神社二座とあり。

○井神

御井神

大國主神。其八上比賣は率て來と雖も。其嫡妻須世理毘賣を畏れて。其生る子は木俣に刺狹みて返る。故に其子を名けて木俣神と

云ふ。亦の名は御井神と謂ふ(古事記)

延喜式神名に。大和國宇陀郡御井社。美濃國多藝郡御井神社。出

雲國秋鹿郡御井神社とあり。

○庭神

庭津日神

阿須波神

波比岐神

庭高津日神

大年神。天知迦流美豆比賣を娶りて生る子庭津日神。次に阿須波

神。次に波比岐神。次に庭高津日神(古事記)

總て屋地を守賜ふ神なり。玉手襪に曰く。曆の始めに土公春は

かま。夏はかと。秋は井。冬にはと有るは即その土地神の四時によりて所座の違ふ由を教へて犯し有せじと爲給ふなり。其は曆書ともに。土公春は竈に在り。竈爐を塗べからず。夏は門に在り。門戸を修覆すべからず。秋は井にあり。井泉を掘穿べからず。冬は庭にあり。庭土を穿つべからず。四時所在之を犯すべからず。但庭に在る者土を犯し咎なしなと有るに依給へるにて。其元は漢籍に出たる説には有れど。其理なき事に非ざれば。此御教へに従ひて随分に犯しなく。其屋地の御守りを祈白すべき事にこそ。

○宅神

屋船久久遅命

木靈なり

屋船豐宇氣姬命

稻靈なり

延喜式大殿祭詞に。皇孫之命の天の御騎日の御騎と造仕奉れる

瑞の御殿。汝屋船命に天津奇護言を以て言壽鎮白さく。此の敷坐る大宮地を平げく安げく護奉る神御名を白さく。屋船久久遅命。屋船豐宇氣姬命と御名をば稱奉りて。皇孫之命の御世を堅磐に常磐に護奉り給へ云々

古史傳に。木草に幸ひ給ふ御靈を屋船命と申す。此御名の意は屋を古言に屋船と言ふにはあらじかと。年頃思へるに合せて御鎮座本記を見れば。外宮神を御船代に鎮め奉れる事を云る。下の注に。船代則謂天材木屋船之靈。故瑞舍名屋船縁也とあり。此に依れば。屋船とは瑞殿を云古言にて。船代とは御靈實を納め奉る器を屋船代と云意に活かして云名なり。然れば屋船命とは豐宇氣毘賣命の屋船を幸ひ護り給ふ御靈を稱す御名にぞ有ける。かくて神祇令に。季夏月次祭條義解に。謂於神祇官與祈年祭同。即如庶人宅神祭と見え。野府記曰。長元元年十一月廿

五日乙卯宅神祭。奥儀抄に保食神は宅神也と見え。また〇〇〇に宅神は倉稻魂命云々とあるなどを合せて思ふに。此頃まではなほ屋船命と申すは豊宇氣毘賣神の事なる由を世人の知て宅神と云て月々にいみしく祭りけむことを知られたり。あな尊きかもこの大神はも食物を幸ひ坐す御功德は更にも云さず。絁織の事も此大神の御身に蠶の生れるより始まり。木にも草にも幸ひ給ひて。屋船をさへに守護給へば。食物住所衣服の道を靈幸へ坐す本つ御祖神に坐て尊しなど申すも更なる神徳になむ坐々ける。うべ天照大御神の重く此御靈を祭らせ給ける事よと云ふ。

○竈神

奥津日子神
奥津比賣神

大年神。天知迦流美豆比賣を娶り生る子奥津日子神。次に奥津比賣神。此二神は諸人以て拜く竈神者なり(古事記)

諸社根元記と云書に。神素戔嗚神。速素戔嗚尊。素戔嗚尊。以上三名。三寶荒神なりと云。此の三名は。書紀の生素戔嗚尊とある條下の注に一書云。神素戔嗚尊。速素戔嗚尊とあるに依り斯く三名の名を三寶荒神と附會したる名にして更に信し難き説なり。三寶荒神のことは次の竈神祭考と玉手襦とに就て知るべし。

竈神祭考に。三寶とは佛法僧なり。荒神とは所謂貪欲神。障碍神。飢渴神の三神にして。貪瞋癡の三毒より化現して一切衆生の福德を奪ひ。又一切の障礙を爲し。貧窮災難をあらしむ。常に家の竈に住て荒神となり。其眷族悉く悪氣邪靈にして人に祟り災厄をなさしむ。故に鎮祭りて三毒を轉じて三寶となすとい

ふ。嗚呼何ぞ豈加様の不正不義の惡鬼ならんや。孟浪浮説信用爲ること勿れと云ふ。

玉手襪に云。師の記傳に今世には三寶荒神なと云ふ穢き名を申すは最淺ましき事なる哉と云れしは實に然る言なるに就て思ふに。火神は伊邪那美神の御語にも心惡子と詔へる如く御心荒く坐まし火に穢ある時は荒び給ふ神にます故に古くも荒神と申せりと聞えて。木國の玉置山と云ふ山に荒神祭神社と申す有りて。此は火神を祭れる社なりと天野信景か鹽尻に見えたり。然れば俗に竈所の神を三寶荒神と稱して。頭の三あり髮の逆さまに生たる物を祭れることは。火神を荒神と申すに就て。兩部習合の説を始めし以來。天竺に謂ゆる障礙神の一名を荒神と稱して。此は何事にも障礙をなす物なりとて。諸の修法の始めにまづ此神を祭り。和むる事あり。斯てそを文字の

同さまに竈所に祭る神たちに附會して混一せる物なり。抑この障礙神と云ふは世に大聖觀喜天とも。聖天とも云ふ物の事にて。天竺には毘那夜迦と云ふ。曾て竈所の事には由緒なき邪物なり。然れば古道に志さん人は然る卑しき邪物の畫像なとは疾く拂てよし。修験者にその祭りを任すとも。神實は古風の竈神に祭り替ふべき事にこそ。

又竈神祭考に云。神祇令季夏月次祭の義解に謂於神祇官祭。與祈年祭同。即如庶人宅神祭也。とある。宅神祭は鎮火をはしめ。門井竈すべて家内の神を祭り奉ることとも聞ゆればなり。そはとまれかくまれ早く三寶荒神といへる名を改めて四時か。又春秋か。おのおの好むかたによりて賑はしく祭り奉るべきなり。さてその祭の法などは。神主を頼みて力のあらんかぎり味き酒。好き肴を奉り。おのれか家内のものより同し氏の人々に

も食しめ。よろつ身の分に随ひて樂しむべく。はた神主の示教のまにまに。とりまかなひてかりにもけがし奉らず。よからん上にもよく。味からん上にも味くして神の御心を和しめ奉り。國の大御爲。家の爲。おのか身の幸福をも乞祈まつり。別ては火の災をはじめ萬の禍ことなからんことを拜み。拜み申奉るべきものなり。かくせは自然に善事榮えて凶事は隠るひぬべきものぞ。さてその合せ祀るべき神々は。

奥津日子神

奥津比賣神

火結神

埴山姫神

罔象女神

二神籠神に坐す

火神軻遇突智神なり

土神

水神

さてこのほかにも合せ祭るべき神等多けれど。そはおしなへ

て別の神忌棚に祀りたれば今ははぶさつ。

○廁神

波邇夜須毗古神

波邇夜須毗賣神

彌都波能賣神

伊邪那美神。火神之迦具土神を生に因て美蕃登炙れて病臥在し。多具理に生ませる神の名は金山毗古神。次に金山毗賣神。次に屎に成ませる神の名は波邇夜須毗古神。次に波邇夜須毗賣神。次に尿に成ませる神の名は彌都波能賣神(古事記)

玉手襪に廁を掌り給ふ神の名は古書に此者廁神と載傳たる文は無れど。世に卜家の神道また橋家の神道など傳ふる人々の説に埴山毘賣神と水波能賣神なりと云ふは實然も有べく。覺ゆ其は此二神は土神水神にて伊邪那美神の御屎と御尿に

成坐ればなりと云ふ。

○穀物神

大年神

御年神

若年神

速須佐之男命大山津見神の女名は神大市比賣を娶りて御子大年神を生み給ふ(古事記)

大年神香用比賣を娶りて生る子御年神(古事記)

大年神の御子羽山戸神大氣都比賣神を娶りて生る子若年神(古事記)

事記

大年神は穀物に功驗ありし神なり。御年神は父神のたすけて。同じ功績を立給ふ神なり。若年神も亦同く穀物に功をなし給ふ。御名の若てふことは。大年に對して稱奉る義なるべし。往昔

大地主神御田を作らしめける時に。田人に牛矢を食しめ給ふ。其時に御年神の御子其田に至り御饗に唾して還り。父大神に其狀を告げるに。御年神大に怒坐て其營田に蝗を放ち給へば。苗葉忽に枯損ねて篠竹と成り枯凋む。故に大地主神巫をして占はしめけるに。是は御年神の祟なれば。白猪白馬白鶏を獻りて其怒を解き給へと教へに。き即ち其教の如く祈申す時に。御年神答て宣はく。實に吾御心なり。宜く麻柄を以て持に作りて。持き其葉を以て拂ひ。天押草を以て押。烏扇を以て扇。仍去す。は溝口に牛矢を置き。男莖形を作りて。蕙子山椒吳桃葉及壩を添て其畔に班ち置き給へと教ふ。大地主神其教の如くなし給ひしかば。苗葉復茂りて年穀豊稔しと云ふ。されば此神は蝗蟲の災にも効驗ある神なれば。除蝗の祈禱には主として此神を拜み申て其御助けを仰くべきものなり。

○播百穀神

倉稻魂神

速須佐之男命又大山津見神の女名は神大市比賣を娶りて御子大年神次に宇迦之御魂神を生み給ふ(古事記)

倉稻とはうけと同く食物の義と云説あり又秦山集に稻荷は稻成の訓五穀の神なりとあり延喜式神名帳頭註に倉稻魂神は百穀を播る神なり故に稻荷と名くか伊弉諾御女に此名ありと云ふ大和豊秋津島卜定記に平京は末深山の時より既に帝都の勢ひ自ら備り辰巳の方に當て倉稻魂の垂跡あり夫れ此神は百穀を播給ふ故に名け奉る神代の昔より此峰に向ひ給ふも知らず只三峰に顯れ給ひしは人皇四十四代元明天皇の和銅四年辛亥二月十一日に垂跡す誠に諸人哀憐の御心深く蒼生の作らむ物は草の片葉まで百の災を禳ひ剩へ隨身の

寶を安く保くとも皆此神業なれば誰か此神を跡くせむと云

へり然れば村里家墅にも小祠を建て稻荷大神を崇奉ること

古今異なるはなし 官幣大社稻荷神社は山城國紀伊郡深草

村稻荷山の麓にあり倉稻魂命素戔鳴尊大市姫命を祀る初は

稻荷山の巔に鎮坐せしが後に今の社地に移ししものゝ如し

世に此三座を稻荷上中下社と云ふ延喜制名神大社に列し又

二十二社の一に位す人皇七十二代後三條天皇の時より屢ば

行幸御幸等の儀ありと云ふ 又大和國廣瀨郡河合村に鎮

坐する官幣大社廣瀨神社は若宇迦乃賣命即ち倉稻魂命を祀

るなり。

○農耕神

大土神

若年神

妹若沙那賣神

彌豆麻岐神

夏高津日神

秋毘賣神

久久年神

大土神天知迦流美豆比賣を娶り生る子大土神亦の名は土之御祖神(古事記)

大女神の御子羽山戸神大氣都比賣神を娶り生る子若年神次に

妹若沙那賣神次に彌豆麻岐神次に夏高津日神亦の名は夏之賣

神次に秋毘賣神次に久久年神(古事記)

大土神は大地主神にて田畑の土を耕すに功ある神なり若年

神は前に述べる如く田穀に功あり彌豆麻岐神は牧を知り給ふ

馬は農事に必用なるものなれば馬を飼ふ事を知食すなり夏

高津日神は草木の生立を主り秋毘賣神は禾穀の實のりを主りて秋の事に功ある神なり久久年神は稻の收穫に功ある神なりされば農業を営む家は必ず拜み齋仕奉るべきなり

○機織神

棚機稚竹秋日媛命

稚日女尊

天八千千比賣神

去來諾尊去來冊尊機祖棚機稚竹秋日媛命を生む(先代舊事本紀)

稚日女尊齋服殿に坐て神の御服を織給ふ素戔嗚尊見そなはし

て則ち斑駒を殿内に投入る稚日女尊乃ち驚き給ひて機より墮

持てる梭を以て體を傷めて神退坐す日本書紀一書

玉手襪に偕また衣服の始めは豊宇氣神の御骸に蠶と桑と生

出しを天照大御神の作り殖しめ其糸を細ぎて天八千々比賣

命と申す神に和衣を織しめ給ひしと云ふ。
攝津國八郡生田宮村に在る生田神社は天照大神の妹稚日
女尊を祀る昔時神功皇后新羅を征して歸り給ふ時皇后の船
直に難波を指す其時御船海中に廻りて進むこと能はず更に
務古の水門に還りて之をトひ給ふ稚日女尊之に誨て吾は活
田長峽に居んと宣ふ即ち神の教の隨に此地に祀り給ひしと
云ふ現今官幣中社に列す。

○衣食住神

豐宇氣毘賣神

伊邪那美神和久産巢日神を生む此神の御子を豐宇氣毘賣神と
謂ふ(古事記)

玉手襪に曰くさて外宮に鎮座ます豐宇氣毘賣神と申すは伊
邪那岐伊邪那美神の御子火神迦具土命と土神埴安姬命との

御間に生坐る稚産靈神と申す神の御子に坐なり須佐之男命
亦名月夜見命に殺され給ひし保食命とも大宜都比賣神とも
申せる神これなり此神の御名なほ宇迦之御魂命稚宇迦賣神
豐宇迦能賣命大宇迦神大御膳神登由氣大神など申してその
御神徳廣大にしてまつ穀類は此神の御體より成始め何にま
れ腹内に藏めて飢を養ふ物はみな此大神の御靈を蒙るは
無き故に宇氣と云ふ名を負ませり宇氣は食の義なるが此を
言のつゝきに依て宇迦とも通はし云ひまた宇を省きて氣と
のみも多く云ひまた尊みては御氣と云ふも常の事にて同く
食の義なり登由氣大神とも申すは余宇を切めて由と云なり
また豐受とも書く受の字はたゞ訓を借るにて更に此字の義
に非ずまた御饌神御膳神など様々に書たるも皆御食の義な
り然れば宇迦之御魂神と申すは食の御靈なる神と申すこと。

保食神と申すは。食を保ち掌る神と申す義なり。偕また此大神の分靈の神二柱あり。其一柱を久久能智神と申して木祖の神にて諸の木は悉この神の御靈に因りて生出たり。其一柱を萱野比賣神と申して草祖の神にて諸の草は皆この神の御靈に因りて生出たり。抑この大神の御徳の顯れたるは。彼須佐之男命荒ひ坐して此神を斬給ひし時に。その御骸に穀物の種ども。牛馬蠶など出來て。それを天照大御神の取寄まして其種等を此物等は愛しき青人草の食て活べき物ぞと詔ひて。天上にて始めて其穀物を殖しめ給ひ。さて蠶の糸を紬ぎて衣服と爲ことを始め給ひ。家住は木もて造り。草もて葺き。木綿麻蠶など。皆その神靈によりて出來たる物なれば外宮に坐す。登由氣大神は。衣食住の神になむ御坐しける。

徵古新編に云。二十二代雄略天皇の御代伊勢の外宮に遷奉れ

るなり。其は延曆儀式帳に。天照坐皇大神云々。大長谷天皇御夢に。誨覺賜く吾高原坐て見し眞岐し處に志都眞利ぬ。然吾一所耳坐は甚苦加之。以大御饌も安不聞食坐故に。丹波國比沼の眞名井に坐我御饌都神等由氣大神を我許欲と誨覺奉き云々。此時天皇驚き悟給ひて。即丹波より度會の山田原に遷奉らせ給ひて。朝夕の御饌も同じく所聞食す事とはなりつるなり。偕此本文に據ば。天照大神は天上にて恒に親しく並び居坐し。等由氣大神も遠離り坐て。唯一所のみ坐ては。朝夕の御饌も御快く聞し食さず在坐つるより。我御饌都神云々とは宣ひつるなり。茲に一所と宣坐るによりて。天上にては必二所並ひ住坐し事を。知り又等由氣大神を慕はせ給へる神慮のほど。唯御饌の上のみならぬ事を伺ひ察り。又大神と宣坐るに依て他臣列の神と俸しからぬ事をも悟るべし。斯在止事なき神徳在坐けるに

よりて。天上にては稚日女尊とも尊奉り。此國にては豊受大神宮とも仰ぎ尊み。天照皇大神宮に並びて伊勢兩宮とも稱奉るになむ。

○食物蠶神

保食神

天照大御神天熊人を遣し往て保食神を看せ給へば。是時保食神實に己に死せり。其神の頂に牛馬化爲有り。願上に粟生り。眉上に蠶生り。眼中に稗生り。腹中に稻生り。陰に麥と大豆小豆生り。天熊人悉持去て進奉る。時に天照大神喜び給ひ是物は顯見蒼生の食て活べきものなりと宣ひて乃ち粟稗麥を以て陸田の種と爲し稻を以て水田の種子と爲し。又口裏に蠶を含んで絲を抽ことを得たり。此より始て養蠶の道有り(日本書紀二書)

延喜式に陸奥國小田郡蠶養國神社は保食神を祀ると云ふ。

○買賣神

市千魂姫神

神皇產靈尊御子市千魂姫神を生む(先代舊事本紀)

市千魂姫神は買賣の干事を主り給ふ神徳に坐すと云ふ。

○造酒神

少彦名神

神功皇后十三年二月癸酉是日皇太后太子を宴す皇太后觴を擧て太子に壽す。因て以て歌て曰。虛能彌企破。和餓彌企那。邏儒區之。能伽彌等。虛豫珥伊麻輸。伊波多多須。周玖那彌伽。未能等。豫保枳。茂苦陪之。訶武保枳。保枳玖琉保之。摩菟利虛辭彌企層(日本書紀) 私記に曰。少彦名神は是造酒神なり。

○漁獵神

天宇受賣命

事代主神

事代主神遊行して出雲國三穗の碕に在す。釣魚を以て樂と爲し。鳥遊するを以て樂と爲す(日本書紀)

天宇受賣命に詔はく。此の御前に立て仕奉る所の猿田毘古大神は専ら顯し申し所なれば。汝送り奉れ。亦其神の御名は汝負仕奉れ。是を以て猿女君等其猿田毘古之男神の名を負て。女を猿女君と呼ぶ事是なり。其猿田毘古神は阿邪訶に坐す時に漁の爲めに比良夫貝に其手を咋合されて海塩に沈溺る。故に其底に沈み居る時の名を底度久御魂と謂ふ。其海水の都夫多都時の名を都夫多都御魂と謂ふ。其阿和佐久の時を阿和佐久御魂と謂ふ。於是猿田毘古神を送りて還り到り。乃ち悉く鱧廣物鱧狹物を追聚めて問て言く。汝は天神の御子に仕奉らんや。諸の魚皆仕奉らんと白す。中に海鼠白さず。天宇受賣命海鼠に謂て云。此口や答へざるの

口とて。紐小刀を以て其口を拆く。故に今に海鼠の口拆たるなり。是を以て御世島の速贄獻るの時猿女君等に給へり(古事記)

○木工家作神

手置帆負神

彦狹知神

手置帆負彦狹知二神をして天御量を以て大峽小峽の材を伐て瑞殿を作り兼て御笠及び矛盾を作らしむ(古語拾遺)

○金工神

天目一箇神

天目一箇神をして雜刀斧及び鐵鐸を作らしむ(古語拾遺)

○鑄工神

石凝姥神

於是思兼神議の從に石凝姥神をして日像の鏡を鑄らしむ。初度

に鑄る所は少か意に合す。次度に鑄る所は其狀美麗し(舌語拾遺)

○福德神

田心姫命

市杵島姫命

湍津姫命

天照大御神詔はく。然らば汝の心の清明何を以て知んと。於是速須佐之男命各宇氣比して子を生なんと答白す。故に各天安河を中に置て宇氣布時に。天照大御神先つ建速須佐之男命の佩せる十拳の劍を乞ひとり。三段に打折て奴那登母由良に。天之眞名井に振滌て佐賀美に迦美て。吹棄る氣吹の狹霧に成る所の神の御名は多紀理毘賣命亦の御名は奥津島比賣命と謂ふ。次に市寸島比賣命亦の御名は狹依毘賣命と謂ふ。次に多岐都比賣命(舌事記)

故に其先に生る所の神多紀理毘賣命は胸形の奥津宮に坐し。次に市寸島比賣命は胸形の中津宮に坐し。次に田寸津比賣命は胸形の邊津宮に坐す。此三柱の神は胸形君等か以て伊都久三前の大神なり(舌事記)

先代舊事紀に。瀧津島姫神。湍津島姫神。市杵島姫神を福德の神と説けり。そは三神俱に島を以て名く。故に是れ土徳の神なり。而して土は萬寶を生ず。故に福德の神と崇奉るなり。宗像神社は。田心姫命。市杵島姫命。湍津姫命の三神を祀る。奥津宮は今筑前國宗像郡大島の北四十八里に在り。中津宮は同郡神湊の北三里大島に在り。邊津宮はもと神湊の東六町海の南一町許に在りしを後今の田島村に遷すと云ふ。此三女の神は天照大御神の勅を奉じ天孫を助け奉らんが爲め天より降り給ひし所と云ふ。現今官幣中社に列す。又市杵島姫命は安藝國

佐伯郡嚴島に鎮坐する官幣中社嚴島神社に祀る。

○煩神ワヅノカミ

和豆良比能宇斯能神

伊邪那岐神詔はく吾は伊邪志許米志許米岐穢國に在けり故吾は御身の禊を爲んと竺紫日向之橘小門之阿波岐原にて禊祓給ふ時御衣を投棄に成る所の神の名は和豆良比能宇斯能神舌事記

古事記傳に曰く此神名御衣に由ありても聞えず強て云はば穢し御衣を脱棄たるは煩はしき事を脱れて心のさはやさたるに似たればか。

○疫疾神ウチノカミ

武塔天神

素戔嗚尊の所行無狀故諸神等千座置戸を科せて遂に之を逐ふ。

是時素戔嗚尊其子五十猛神を帥めて新羅國に降到り曾戸茂梨の處に居る云々日本書紀一書

備後風土記には昔北海に坐す武塔天神南海神の女子をよはひに坐に日暮る彼所に蘇民將來二人在りき兄蘇民將來甚だ貧窮なり弟蘇民將來富饒にして屋倉一百有りき爰に塔神宿處を借るに惜みて借さす兄蘇民將來借奉る云々後に年を経て八柱の子を率る還り來て詔はく我將に之を奉して報答せんとす即ち詔はく吾は速須佐雄能神なり後世に疫氣在れば汝蘇民將來の子孫と云て茅輪を以て腰上に著と詔ふ詔の隨に著しめば即ち家に在る人は免ると詔ひきとあり八坂神社記には天竺の北方に現はれし神なりと見え此神社の祭神は他に八王子稻田姫等を合祀すとあれば素戔嗚尊たること論なし然れとも素戔嗚尊を武塔天神と稱すること天竺に渡り

給ふこと更に史には見えす。新羅國に到降り給ふこと一書の傳なれば此時に天竺へも降り給ひしならんか。風土記に北海に坐し武塔天神南海に到り坐し云々とあるを見れば。或は天竺ならんか。伊呂波字類抄神祇の部に牛頭天皇因縁と題し天竺の北方に吉詳と云ふ國あり其國中の城の王を牛頭天王又武塔天神と云ひ薩迦陀と云ふ女を后として八王子を生むとあり。蘇民將來の家に率ひ還り給ふ八王子も天竺にて生れし子ならん。兎に角武塔天神と稱するも牛頭天王と稱するも新羅に降到り坐し時の事なれば。出典は書紀の一書を掲ぐる事とせり。

八坂神社は山城國愛宕郡八坂郷に在りて。又祇園と稱す祇園天神を祀る。此神は牛頭天王又武塔天神とも云ひてもと天竺の北方に現はれし神なりと稱す。備後風土記に之を素戔鳴尊

と爲せり。此他に八王子稻田姫等を合祀す。其創始は或は貞觀十八年播摩國廣峰より遷し給ひしを元慶年間に神殿を建てて勸請せしと云ふ。延喜式外の神社なれども二十二社の一として朝廷の尊崇軽からず。又特に疫疾等の事あれば奉幣若くは佛事を修する例なりき。現今官幣中社に列す。

○醫藥神

大己貴命

少彥名命

夫大己貴命と少彥名命と力を戮せ心を一にし天下を經營給ふ。復顯見蒼生及び畜産の爲に其病を療るの方を定め。又鳥獸昆蟲の災異を攘はん爲に其禁厭の法を定む。是以て百姓今に至るまで咸く恩賴を蒙る。日本書紀一書

齊衡三年十二月戊戌常陸國上言す。鹿島郡大洗磯前に神有り新

に降り給ふ。初郡民海を煮て鹽を爲る者あり。夜半に海を望めは光耀天に屬く。明日兩恠石の水次に在るを見る。高さ各尺計り神造に體し人間の石に非ず。鹽翁私に之を異む。去後一日亦廿餘の小石ありて石の左右に向て在り。侍座する若きに似たり。彩色常に非ず。或は沙門に形す。唯耳目無し。時に神人に憑て云。我は是れ大奈母知少比古奈命なり。昔此國を造り訖り去て東海に住る。今民を濟んか爲に更に亦來り歸と宣ふと云。(文德實錄)

大已貴命は常陸國東茨城郡磯濱町に鎮座する。大洗磯前神社に祀る。少彦名命は同國那珂郡平磯町に鎮座する。酒列磯前神社に祀る。並に現今國幣中社たり。

○劍靈神

石上布都魂神

神武天皇獨皇子手研耳命と軍を帥めて進て熊野荒坂津に至り

因て丹敷戸畔を誅し給ふ時神は毒氣を吐き人物咸く瘁ぬ。是に由て皇軍復振こと能はず。時に彼處に人有り熊野高倉下と號く。忽ち夜夢る。天照大神武甕雷神に謂て曰く。夫葦原中國は猶喧擾の響を聞く。宜く汝更往て之を征と宣ふ。武甕雷神對て曰く。予行すと雖も予の國平の劍を下さば則ち國將に自ら平ぎなんと白す。天照大神諾ひ給ふ。武甕雷神登ち高倉に謂曰く。予が劍を號て師靈と曰ふ。今當に汝が庫裏に置べし。宜く取て之を天孫に獻れと宣ふ。高倉唯々と白して寤ぬ。明日夢中の教に依て庫を開て之を視れば果して落劍有り。倒に庫の底板に立り即取て以て之を進む。時に天皇適寐ませり。忽然として寤て予何ぞ若此長眠しつるやと宣ふ。尋て毒に中る士卒悉く復醒ぬ。(日本書紀)

布都御魂の神劍は石上布都大神と稱へ。大和國山邊郡石上村の北布留村に鎮坐する。石上神宮に祀る。一名を佐士布都とも

囊布都神とも稱す古は布留御魂神社と云ひ又布留社とも稱す。神武天皇東征して熊野に至り給ひし時に武甕雷神其國土を平定せし神劍を降し給ふ。其神劍は即ち布都御魂なり。天皇皇都を檀原に定め給ふに至り之を殿内に奉祀せしが崇神天皇の御世始て神宮を石上邑に建設し因て石上大神と號す。是即ち此神社の起原なり。現今官幣大社に列す。凡て武神祭軍神祭には俱に此神靈を齋祀り其御威稜を崇敬ひ靈異の神徳を拜し奉るべきものぞ。

○鳴鏑神

大山咋神

大年神天知迦流美豆比賣を娶りて生る子大山咋神亦名は山末の大主神。此神は近淡海國の日枝山に坐す亦葛野の松尾に坐す。鳴鏑を用る神なる者なり(古事記)

古事記傳に曰く大山咋神山末之大主神。此二の名義いかなる故か未思得ず。山と云は共に日枝山に因れる名にや云々。咋とは亦名の大主と同意にて其山に主はき坐意にや。又山に末と云は麓を山本と云ふに對ひて上方のことなり。又曰く松尾は神名式に山城國葛野郡松尾神社二座これなり。此御社は古より佛ざたの混らぬ故に今に至るまで大山咋神とさたかに傳へ申せり。用鳴鏑神。鳴鏑のことは上に見ゆ。さて此は鳴鏑を用ひて祭ること、聞ゆめれど。然ては言足ず。故に思ふに用字は成又化などの誤か。若然らば鳴鏑爾那理坐流神那理と訓べし。如此謂所以は山城國風土記云。所謂丹塗矢者乙訓郡社坐火雷命在。また釋日本紀云。賀茂別雷命父丹塗矢乙訓郡坐火雷神社是也。亦秦氏大赤帳者戶上矢者松尾大明神是也。松尾大明神者大山咋神。用鳴鏑神也。是を考合するに彼丹塗矢は即此大山

昨神の化たまへるなり。故今成鳴鏑神者也。ならむと云なり。
 山城風土記に云ふ。彼丹塗矢なる者は。山城國愛宕郡糾の森に
 在る官幣大社賀茂神社に祀る。賀茂建角身命丹波國神野神伊
 可古夜日女を娶りて御子玉依日賣を生む。玉依日賣石川の瀬
 見小川に遊ぶ時に。丹塗矢川上より流れ下る。乃ち取て床邊に
 挿み置く。遂に孕て男子を生む。成人に至る時に。外祖父建角身
 命。八尋屋を造り。八戸の扉を豎。八腹の酒を醸して。神集めに集
 め。七日七夜樂遊し。然して子と言語す。汝父と思ん人に。此酒を
 飲しめよと云ふ。即ち酒杯を舉て天に向ひ祭を爲し。屋藁を分
 穿て天に升る。乃ち因て外祖父の名を取て。可茂別雷命と號す
 と云ふ。又本朝月令には。即ち雷公と爲て。屋棟を折破て天に升
 ると云ふ。松尾神社は。山城國葛野郡松尾山の麓に在り。大山
 昨命市杵島姫命を祀る。古來朝廷の尊崇重く。現今官幣大社に

列す。日吉神社は。近江國滋賀郡坂本村に在り。世に山王と稱
 す。其大宮は大比叡と稱し。大和國大輪明神を祀り。二宮は小
 比叡と稱し。大山昨神を祀る。大山昨神は。初め比叡山の横川に
 鎮座せしが。延暦中僧最澄が。延暦寺を建るに及ひ。大三輪神を
 山上に祀りて。是を寺の鎮守と爲し。然して大山昨神の社を山
 下に移せりと云ふ。抑大山昨神は。原來此山に鎮座せるを以て。
 是を地主神と云ふ。現今官幣大社たり。さて大山昨神は。山末
 の大主神と申し。山を幸ふ神に坐ば。比叡山の地主神と稱奉る
 は。さる事ながら。弓矢は。武に用る物にて。鏑矢の神徳に坐ば。武
 の事にも功ある神ならんか。別雷命の屋藁を分穿ちて。天に升
 り給ふを以て見るも。父神の鏑矢の御威稜の勇猛なることを
 思ひ見るべきなり。又古事談に住吉大明神の託宣に。昔新羅を
 伐の時は。吾大將軍と爲り。日吉副將軍と爲る。其後將門を伐の

時は日吉大將軍と爲り吾副將軍と爲ると宣ふ由も見えたり。又日吉社記に本宮祭神大山咋神神代より此地に鎮座し給ふとあれば新羅を征伐し給ふ時も將門追討の時も大山咋神なる日吉大明神の主として預り給ふことしるべきなり。されば住吉大神と日吉大神とは武の事には海陸の軍神と稱奉り拜み奉らば靈異の神徳を蒙る由もあらんか。因て微臣が願白すまにまに鳴鏑神と稱奉るなり。

○樹種神

五十猛神

初め五十猛神天降坐す時に多く樹種を將て下る。然れども韓地に殖盡さず。以て持歸りて遂に筑紫より始め。凡て大八洲國の内。に播殖して青山を成さずと云ことなし。所以に五十猛神を稱て有功の神と爲す。即紀伊國所坐大神是なり。日本書紀一書。

伊太祁曾神社は紀伊國名草郡伊太祁曾村に在り。五十猛神を祀る。延喜の制名神大社に列し。現今國幣中社たり。

○木綿神

天日鷲命

天日鷲命を木綿作者と爲す。日本書紀一書。玉手襪には穀木神となす。天日鷲命と云ふ神は穀木の皮をもて白布を織ると云ふ。天日鷲命は阿波國麻殖郡徳島に鎮座する忌部神社に祀る。延喜の制名神大社に列し。現今國幣中社たり。

○麻神

長白羽命

長白羽神をして麻を種て以て青和幣を爲らしむ。古語拾遺。玉手襪に云。長白羽命またの名。天羽槌雄命と申す神は麻をも

て青布を織り。また倭文と云ふ物をも織たるが始にして上代の衣服は其和衣荒衣にそ有ける。

○薪神

羽山戸神

大年神天知迦流豆比賣を娶りて生る子羽山戸神(古事記)

此神の名は端山の義にて人の尤も用便となる薪に功ありし神なり。

○鹽神

鹽祖事勝食勝國長狹命

去來諾尊。去來冊尊御子。鹽祖事勝食勝國長狹命又の名は鹽土老翁命を生む(先代舊事本紀)

鹽土老翁は陸前國宮城郡鹽竈町に在る國幣中社鹽竈神社に祀る。

○馬神

彌豆麻岐神

大年神の子羽山戸神大氣都比賣神を娶りて生る子彌豆麻岐神

(古事記)

此神の御名の義はみつは御威稜にてまきは牧なり。馬は軍隊農事に必用なる物なれば馬を飼ふことを幸ふ神徳に坐す神なり。

○獸畜神

麋鹿神

去來諾尊。去來冊尊。復麋鹿神を生む。此神は獸畜の神なり(先代舊事

本紀)

○禽鳥神

色鳥神

去來諾尊。去來冊尊。復色鳥神を生む。此神は禽鳥神なり(先代舊事本紀)

○介蟲神

酢貝媛神

去來諾尊。去來冊尊。次に酢貝媛神を生む。此神は介蟲神なり(先代

舊事本紀)

○龍鱗神

大海分子神

大海分女神

去來諾尊。去來冊尊。次に大海分子神。次に大海分女神を生む。此二

神は龍鱗の神なり(先代舊事本紀)

○樂章神

天思兼命

天照大神乃ち天巖窟に入り石戸を閉て幽居し給ふ。是に於て天

思兼命は則ち神樂歌章を作りて之を八百萬神に教へ同く共に之を歌ふ(先代舊事本紀)

○笛神

天鷄面命

笛師天鷄面命をして天香山の金竹を採て其虚節を兼作り風孔

を彫て氣を通し以て之を吹しむ(先代舊事本紀)

○鼓神

天狗狸神

國狗狸神

鼓師天狗狸神國狗狸神をして天斑駒皮を以て天柔音鼓天剛音

鼓を作りて之を撃しむ(先代舊事本紀)

○太鼓神

天鳴龍尾命

太鳴鼓師天鳴龍尾命をして天虛木を以て太鳴鼓を作りて之を
撃しむ(先代舊事本紀)

○琴神

天牛首神

琴師天牛首神をして天真弓六張を並張り伏張り以て之を鼓し

む(先代舊事本紀)

○神樂俳優神

天鈿女命

天鈿女命をして手舞足踏み以て天津神樂の曲を奏しむ又天に
於て天鈿女命天香久山の眞辟葛を以て髪と爲し蘿葛を以て手
助と爲し小竹葉を以て手草と爲し手に鈴を著る矛を持て天の
巖窟の前に立て庭燎を舉げ天熱湯を涌て巧に俳優を作し履槽
を踏鳴し以て神託を爲て胸乳を露し裳紐を推垂れ以て其陰を

顯す是時八百萬神悉く皆噀喇て大に之を笑ふ(先代舊事本紀)

神靈發顯大尾

明治四十一年八月廿九日印刷
明治四十一年九月五日發兌

定價金六拾錢
郵稅金六拾錢

著者

東京府北豐島郡日暮里村大字金杉
貳百三拾六番地土族
笹田 默 介

發行所

東京府北豐島郡日暮里村大字金杉
貳百三拾六番地
敬 信 社

發行所

東京市小石川區原町四拾四番地
大成教務廳出版部

印刷者

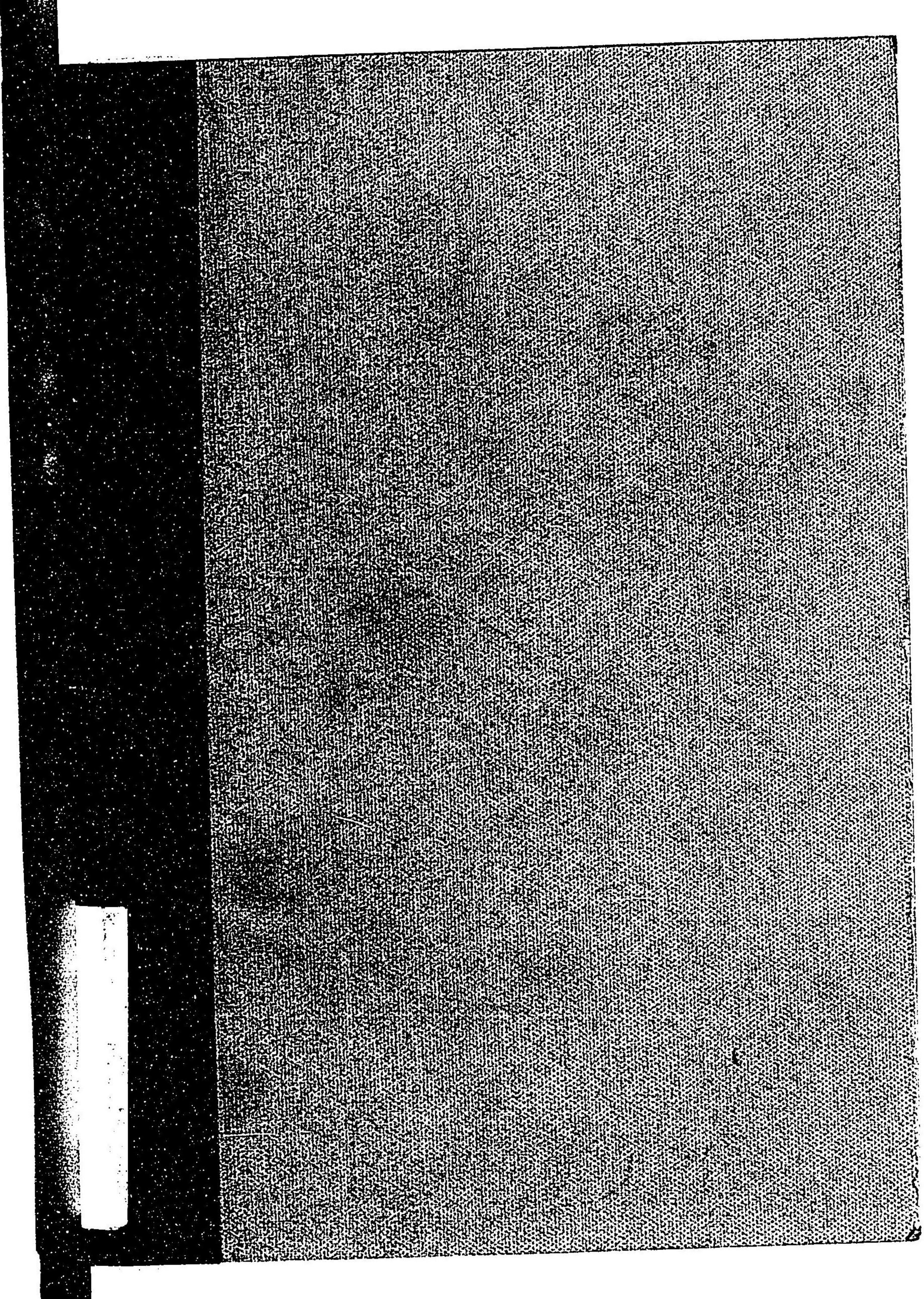
東京市神田區表神保町二番地
三 島 宇 一 郎

賣捌所

東京市日本橋區下槇町拾六番地
文星堂 直江外次郎

不許複製

IT 22-53



特 21

800

014298-000-2

特21-800

神靈発願

笹田 黙介/編

M41

ABB-0640

